

マトロイドの射について

専修大 経営 佐藤 創
大阪大 基礎工 小林欣吾
電総研 数理基礎 星 守

まえがき

マトロイドの圏(category)を構成するにあたり、マトロイドの射(morphism)として何を指定すれば“有効であるか”という点に関してはまだ決定的な結論が得られていないようと思われる。マトロイドを定義づける集合族にはいろいろなもののが考えられるが、マトロイドの射はそれらの集合族のいすれかを“保存”することが望ましい。われわれはまず、各種の集合族の間の関係を整理し、それぞれの集合族を保存する対応または写像を射とするマトロイドの圏を考え、それらの相違点などについて考察した。

[1] 準備

1.1 圈の定義

簡単に圈を定義しておく。^{[1], [2]}

対象(object)と呼ばれるものの集まり(クラス) \mathcal{O} が定められていて、その中の任意の二つの対象 A と B に対して A から B への射(morphism)と呼ばれるものの集合 $M[A, B]$ が指定されているとする。ただし、 $(A, B) \neq (A', B')$ ならば $M[A, B] \cap M[A', B'] = \emptyset$ であるものとする。

射 $\alpha \in M[A, B]$ を $\alpha: A \rightarrow B$ または $A \xrightarrow{\alpha} B$ で表す。

任意の射 $\alpha: A \rightarrow B$, $\beta: B \rightarrow C$ に対して射の合成 $\beta\alpha: A \rightarrow C$ が定義されていて、次の条件を満たすとき、 (\mathcal{O}, M) を圈(category)と呼ぶ。

1) $\alpha: A \rightarrow B$, $\beta: B \rightarrow C$, $\gamma: C \rightarrow D$ に対して

$$(\gamma\beta)\alpha = \gamma(\beta\alpha)$$

2) すべての対象 A に対して恒等射 $1_A: A \rightarrow A$ が存在し

任意の射 $\alpha: A \rightarrow B$, $\beta: C \rightarrow A$ に対して

$$\alpha 1_A = \alpha, \quad 1_A \beta = \beta$$

圈における諸概念は以下必要に応じて定義する。

1.2 マトロイドの定義

マトロイドの定義には至るに等価な公理系がいくつも考えられているが、独立集合族によるものを掲げておく。^[3]

E を有限集合, \mathcal{J} を E の部分集合の族とする。 \mathcal{J} が次の条件を満たすとき, $M = (E, \mathcal{J})$ を E 上の マトロイド (matroid) と呼び, \mathcal{J} の要素を M の 独立集合 と呼ぶ。

- 1) $\emptyset \in \mathcal{J}$
- 2) $I \in \mathcal{J}, J \subset I$ ならば $J \in \mathcal{J}$
- 3) $I, J \in \mathcal{J}$ かつ $|I| > |J|$ ならば
 $\exists x \in I - J \quad J \cup \{x\} \in \mathcal{J}$

[記号 $|I|$ は集合 I の要素の個数を表わす]

このとき E を M の 台集合 と呼ぶ。一般に, マトロイド M の台集合を E_M で表わす。

M を E 上のマトロイド, \mathcal{J}_M を M の独立集合の族とするととき, M に関する 階数関数 $P_M: 2^E \rightarrow M$, 閉包作用子 $\sigma_M: 2^E \rightarrow 2^E$ を次のように定義する。すなはち, E の任意の部分集合 X に対して,

$$P_M X = \max \{ |I| ; I \subset X \text{ かつ } I \in \mathcal{J}_M \}$$

を X の 階数 と呼び,

$$\sigma_M X = \{ y ; P_M(X \cup \{y\}) = P_M X \}$$

を X の 閉包 と呼ぶ。特に, $P_M E$ をマトロイド M の 階数 と呼び, $P(M)$ で表わす。

$\mathcal{J}_M, P_M, \sigma_M$ を用いて さらに 次のようないくつかの部分集合族 (\mathcal{J}_M') を定義する。

——マトロイド M に関する——) が定義される。

\mathcal{D}_M : 従属集合 (独立集合でない集合) の族

\mathcal{C}_M : サーキット (極小の従属集合) の族

\mathcal{B}_M : 基 (極大の独立集合) の族

\mathcal{S}_M : スパン集合 (基を含む集合) の族

\mathcal{F}_M : フラット ($\sigma_M F = F$ なる集合 F) の族

\mathcal{A}_M : 超平面 ($H \in \mathcal{F}_M$ かつ $P_M H = P(M)-1$ なる H) の族

\mathcal{T}_M : T-フラット (サーキットの和集合) の族

[W. T. Tutte^[4]によるフラットの定義は上記の \mathcal{F}_M とは異なるので、それを T-フラットと呼ぶことにした]

マトロイド理論で用いられている集合族にはこれ以外に、
コサーキット族、補基族などがある。

以上に定義した集合族は、そのいずれのものが与えられても他の集合族をそれぞれ一意的に決定する。したがって各集合族に関するマトロイドの公理系をつくることができる^[5]。

1.3 マトロイドの例

任意の有限集合 E ($|E| = m$) に対して、各個の要素をもつすべての部分集合の族 $(\binom{E}{k}) = \{X; X \subseteq E, |X| = k\}$ は独立集合の条件を満たし、 $(E, (\binom{E}{k}))$ はマトロイドとなる。このような構造をもつマトロイドを 一様マトロイド と総称し、 $U_{k,m}$ で表わす。特に、 $U_{0,0}$ は空集合の上の唯一のマトロ

イドでこれを零マトロイドと呼び、○で表わすことにする。

グラフ G の辺集合を E とし、 G のすべての初等閉路の集合を C とすれば、 C はマトロイドのサーキット族となる（閉路を含まない集合が独立集合である）。このようにして定義されるマトロイドをグラフ G の閉路マトロイドと呼ぶ。以下で具体的なマトロイドを例示するときにはこのグラフによる表現を多く用いる（すべてのマトロイドがグラフの閉路マトロイドとして表現できるわけではない。簡単な例は $U_{2,4}$ ）。

マトロイド M に対して

$$B_M^* = \{ E - B ; B \in B_M \}$$

とすれば、 B_M^* はあるマトロイド M^* の基族 B_{M^*} となることが知られていて、 M^* は M の双対マトロイドと呼ばれる。

[2] マトロイド集合族

2.1 集合族作用子

マトロイドに関する集合族をいくつか 1.2 で示したが、これらの相互関係については従来必ずしも均齊のされた形式で表現されていなかったとは言えない。われわれは位相空間論からの類推とともにこれらの集合族の相互関係を体系的に整理することを試めた。まず、一般に有限集合 E の部分集合族を以て次的作用子 ($2^E \rightarrow 2^E$) を導入しておく。

定義

$$\text{sub } \mathcal{X} = \{ Y; \exists X \in \mathcal{X} \quad Y \subset X \}$$

$$\text{quot } \mathcal{X} = \{ Y; \exists X \in \mathcal{X} \quad X \subset Y \}$$

$$\text{meet } \mathcal{X} = \{ \cap \mathcal{X}' ; \mathcal{X}' \subset \mathcal{X} \} \quad (\text{特に } \cap \emptyset = E)$$

$$\text{join } \mathcal{X} = \{ \cup \mathcal{X}' ; \mathcal{X}' \subset \mathcal{X} \} \quad (\text{特に } \cup \emptyset = \emptyset)$$

$$\text{max } \mathcal{X} = \{ Y; Y \in \mathcal{X}, \forall X \in \mathcal{X} \quad Y \subset X \text{ ならば } X = Y \}$$

$$\text{min } \mathcal{X} = \{ Y; Y \in \mathcal{X}, \forall X \in \mathcal{X} \quad X \subset Y \text{ ならば } X = Y \}$$

$$\text{maxi } \mathcal{X} = \text{max}(\mathcal{X} - \{E\})$$

$$\text{mini } \mathcal{X} = \text{min}(\mathcal{X} - \{\emptyset\})$$

$$\mathcal{X}^c = \{ Y; Y \notin \mathcal{X} \} \quad (\mathcal{X} \text{ の "補" 集合族})$$

$$\mathcal{X}^r = \{ E - X; X \in \mathcal{X} \} \quad (\mathcal{X} \text{ の "反転" 集合族})$$

[quot は sub に対する quotient set の略, max \mathcal{X} は \mathcal{X} の極大集合族, min \mathcal{X} は \mathcal{X} の極小集合族である]

各作用子の定義から直ちに次の性質が導かれる。

命題 1

$$(1.1) \text{ sub } \mathcal{X} \circ \mathcal{X}$$

$$(1.2) \text{ quot } \mathcal{X} \circ \mathcal{X}$$

$$(1.3) \text{ meet } \mathcal{X} \circ \mathcal{X}$$

$$(1.4) \text{ join } \mathcal{X} \circ \mathcal{X}$$

$$(1.5) \text{ max } \mathcal{X} \subset \mathcal{X}$$

$$(1.6) \text{ min } \mathcal{X} \subset \mathcal{X}$$

$$(1.7) \text{ maxi } \mathcal{X} \subset \mathcal{X}$$

$$(1.8) \text{ mini } \mathcal{X} \subset \mathcal{X}$$

$$(2.1) \text{ sub} \cdot \text{sub } \mathcal{X} = \text{sub } \mathcal{X} \quad (2.2) \text{ quot} \cdot \text{quot } \mathcal{X} = \text{quot } \mathcal{X}$$

$$(2.3) \text{meet} \cdot \text{meet } x = \text{meet } x \quad (2.4) \text{join} \cdot \text{join } x = \text{join } x$$

$$(2.5) \text{max} \cdot \text{max } x = \text{max } x \quad (2.6) \text{min} \cdot \text{min } x = \text{min } x$$

$$(2.7) \text{maxi} \cdot \text{maxi } x = \text{maxi } x \quad (2.8) \text{mini} \cdot \text{mini } x = \text{mini } x$$

$$(3) x \subset y \text{ すなはち}$$

$$(3.1) \text{sub } x \subset \text{sub } y \quad (3.2) \text{quot } x \subset \text{quot } y$$

$$(3.3) \text{meet } x \subset \text{meet } y \quad (3.4) \text{join } x \subset \text{join } y$$

$$(3.5) x^c \supset y^c \quad (3.6) x^r \supset y^r$$

$$(4.1) \text{sub} \cdot \text{max } x = \text{sub } x \quad (4.2) \text{quot} \cdot \text{min } x = \text{quot } x$$

$$(4.3) \text{max} \cdot \text{sub } x = \text{max } x \quad (4.4) \text{min} \cdot \text{quot } x = \text{min } x$$

$$(4.5) \text{meet} \cdot \text{maxi } x \subset \text{meet } x \quad (4.6) \text{join} \cdot \text{mini } x \subset \text{join } x$$

$$(4.7) \text{maxi} \cdot \text{meet } x = \text{maxi } x \quad (4.8) \text{mini} \cdot \text{join } x = \text{mini } x$$

$$(5.1) x^{cc} = x \quad (5.2) x^{rr} = x \quad (5.3) x^{rc} = x^{cr}$$

$$(6.1) \text{sub } x^r = (\text{quot } x)^r \quad (6.2) \text{quot } x^r = (\text{sub } x)^r$$

$$(6.3) \text{meet } x^r = (\text{join } x)^r \quad (6.4) \text{join } x^r = (\text{meet } x)^r$$

$$(6.5) \text{max } x^r = (\text{min } x)^r \quad (6.6) \text{min } x^r = (\text{max } x)^r$$

$$(6.7) \text{maxi } x^r = (\text{mini } x)^r \quad (6.8) \text{mini } x^r = (\text{maxi } x)^r$$

証明 一部のみ示す。他も同様。

$$(4.1) X \in x \text{ すなはち}, \text{max } x \text{ の定義と } E \text{ の有限性} \vdash \exists$$

$$\exists x_1 \in \text{max } x \quad X \subset x_1, \text{すなはち} X \in \text{sub} \cdot \text{max } x, \text{すなはち}$$

$$x \subset \text{sub} \cdot \text{max } x. \text{ これら} \vdash (3.1) \& (2.1) \vdash \exists' \text{ sub } x \subset$$

$$\text{sub} \cdot \text{max } x \text{ すなはち} - \exists, (1.5) \& (3.1) \& \exists' \text{ sub} \cdot \text{max } x \subset$$

$\text{sub } \mathcal{X}$ が得られる。

(4.7) $\mathcal{X} = \{E\}$ のときは $\text{meet } \mathcal{X} = \mathcal{X}$ で両辺 \emptyset と \mathcal{X} だ。

$X \in \text{maxi } \text{meet } \mathcal{X}$ とすれば、 $X \in \text{meet } \mathcal{X} - \{E\}$ でありから
 $\exists X_1 \in \mathcal{X} - \{E\} \quad X \subset X_1$, さらに $\exists X_2 \in \text{maxi } \mathcal{X} \quad X_1 \subset X_2$.

(1.7) & (1.3) は $\mathcal{X} \neq \emptyset$ のとき $X_2 \in \text{meet } \mathcal{X} - \{E\}$ であるから $X = X_2$,
 ゆえに $X \in \text{maxi } \mathcal{X}$, すなはち $\text{maxi } \text{meet } \mathcal{X} \subset \text{maxi } \mathcal{X}$ 。一方,
 $X \in \text{maxi } \mathcal{X}$ とすれば、 $X \in \text{meet } \mathcal{X} - \{E\}$ であり, 任意の $X' \in \text{meet } \mathcal{X} - \{E\}$ に対してもし $X \subset X'$ ならば, $X' = \cap \mathcal{X}'$,
 $\mathcal{X}' = \{X_\lambda; X_\lambda \in \mathcal{X} - \{E\}, \lambda \in \Lambda\}$ とおくと各入力 $x \in$
 $X \subset X_\lambda$ と \mathcal{X} だが, $X \in \text{maxi } \mathcal{X}$ であるから $X = X_\lambda$,
 すなはち $X = X'$ である。ゆえに $X \in \text{maxi } \text{meet } \mathcal{X}$, すなはち
 $\text{maxi } \mathcal{X} \subset \text{maxi } \text{meet } \mathcal{X}$ が得られる。

(6.1) $X \in \text{sub } \mathcal{X}^r \Leftrightarrow \exists Y \in \mathcal{X}^r \quad X \subset Y \Leftrightarrow \exists E - Y \in \mathcal{X} \quad E - Y$
 $\subset E - X \Leftrightarrow E - X \in \text{quot } \mathcal{X} \Leftrightarrow X \in (\text{quot } \mathcal{X})^r$

(証明終)

E の部分集合の族に関する次の概念を定義する。

定義 $\mathcal{X}, \mathcal{Y}, \mathcal{Z}, \mathcal{U}, \mathcal{V}$ を E の部分集合族とする。

\mathcal{X} が 下に閉 とは $\text{sub } \mathcal{X} = \mathcal{X}$

\mathcal{X} が 上に閉 とは $\text{quot } \mathcal{X} = \mathcal{X}$

\mathcal{U} が 交完備 とは $\text{meet } \mathcal{U} = \mathcal{U}$

\mathcal{U} が 結完備 とは $\text{join } \mathcal{U} = \mathcal{U}$

下に閉なるに対して、 y が x の上基 とは $x = \text{sub } y$

上に閉なるに対して、 y が z の下基 とは $z = \text{quot } y$

交完備な v に対して、 y が v の閉基 とは $v = \text{meet } y$

結完備な u に対して、 y が u の閉基 とは $u = \text{join } y$

命題1 (2.1)~(2.4) により、任意の集合族 y に対して、

$$x = \text{sub } y, z = \text{quot } y, v = \text{meet } y, u = \text{join } y$$

はそれぞれ、下に閉、上に閉、交完備、結完備な集合族となる。空な集合 \emptyset は下に閉、かつ上に閉であり、 $\text{meet } \emptyset = \{\emptyset\}$, $\text{join } \emptyset = \{\emptyset\}$ であるから、

x が下に閉、空でない ならば x の (最小元) ,

z が上に閉、空でない ならば z の E (最大元) ,

v が交完備 ならば v の E (最大元), $\cap v$ (最小元),

u が結完備 ならば u の \emptyset (最小元), $\cup u$ (最大元)

である。

一般に、交完備な集合族、結完備な集合族は集合の包含関係を順序として束をなす。たとえば、 $v (\neq \emptyset)$ を交完備な集合族、 $V_1, V_2 \in v$ とすれば、

$$\inf \{V_1, V_2\} = V_1 \cap V_2 ,$$

$$\sup \{V_1, V_2\} = \cap \{V; V \in v \quad V \supseteq V_1 \cup V_2\}$$

と定義される。

命題2

(1) X の下に用ならば, $\max X$ は X の最小の上基である:

$$\text{sub} \cdot \max X = X ; \text{sub } Y = X \text{ ならば } \max X \subset Y$$

(2) X の上に用ならば, $\min X$ は X の最小の下基である:

$$\text{quot} \cdot \min X = X ; \text{quot } Y = X \text{ ならば } \min X \subset Y$$

証明 (1) の前半は命題1 (4.1), 後半は同 (4.3) と (4.5) によう。

(2) については (1) と双対的。

(証明終)

(注意) \cup が交完備であっても, $\max_i \cup$ が \cup の上基であるとは限らない ($\text{meet} \cdot \max_i \cup \subset \cup$) が, もしそうならば最小の上基となる。 \cup が結完備についても同様 ($\text{join} \cdot \min_i \cup \subset \cup$).

命題3

任意の集合族 \mathcal{Y} ($\subset 2^E$) に対して次の条件は互いに同値である。

$$(1) Y_1, Y_2 \in \mathcal{Y} \Rightarrow Y_1 \subseteq Y_2 \text{ は真}$$

$$(2) \max \mathcal{Y} = \mathcal{Y}$$

$$(3) \min \mathcal{Y} = \mathcal{Y}$$

$\mathcal{Y} \neq \{E\}$ のときには, 次の条件とも同値である。

$$(4) \max_i \mathcal{Y} = \mathcal{Y}$$

$\mathcal{Y} \neq \{E\}$ のときには, 次の条件とも同値である。

$$(5) \min_i \mathcal{Y} = \mathcal{Y}$$

証明 (1) \Leftrightarrow (2) を示す。 (1) \Leftrightarrow (3) は同様。

(2) “ \exists いとすれば” $\max Y \in Y$ から $\exists Y_1 \in Y - \max Y$,
 $\exists Y_2 \in \max Y \quad Y_1 \subseteq Y_2$ とあり, (1) が成り。逆に, (1) が
 成りとすれば, $\exists Y_1, Y_2 \in Y \quad Y_1 \subseteq Y_2$ から $Y_1 \in \max Y$ となり $\max Y \in Y$, すなはち (2) が成り。
 $Y \neq \{E\}$ ならば, $\max Y = \max Y$ 。ゆえに, (2) \Leftrightarrow (4)。
 $Y \neq \{\emptyset\}$ ならば同様にして (3) \Leftrightarrow (5)。 (証明終)

定義 命題3で述べられてる互いに同値な条件を満すものを満たす集合族は全非連結であるといふ。特に, $\{E\}$ と $\{\emptyset\}$ を自明な全非連結集合族と呼ぶ(空の族も全非連結ではあるが自明とは呼び方いことにする)。

命題4 Y を全非連結な集合族とするとき,

(1) Y は下閉包集合族 $Z = \text{sub } Y$ の最小の上基である:

$$\max \cdot \text{sub } Y = Y$$

(2) Y は上閉包集合族 $Z = \text{quot } Y$ の最小の下基である:

$$\min \cdot \text{quot } Y = Y$$

(3) さらに, $Y \neq \{E\}$ ならば, Y は交完備な集合族 $V = \text{meet } Y$ の最小の閉基である: $\max \cdot \text{meet } Y = Y$

(4) さらに, $Y \neq \{\emptyset\}$ ならば, Y は結完備な集合族 $U = \text{join } Y$ の最小の開基である: $\min \cdot \text{join } Y = Y$

$$(5) Y = \text{sub } Y \cap \text{quot } Y$$

(6) さらに、 Y が非自明ならば

$$Y = \text{meet } Y \cap \text{join } Y - \{E, \emptyset\}$$

証明 (1) 命題 1 (4.3) および命題 3 により明らか。(2) も同様。

(3) 序基であることは命題 1 (4.7) と命題 3 による。最小性は命題 1 (4.7), (1.7) による。(4) も同様。

(5) $Y \subset \text{sub } Y \cap \text{quot } Y$ は明らか。 $Y \in \text{sub } Y \cap \text{quot } Y$ とすれば $\exists Y_1, Y_2 \in Y \quad Y_2 \subset Y \subset Y_1$ であるが、 Y の全非連結性により $Y_2 = Y = Y_1$, すなはち $Y \in Y$ 。

(6) $Y \subset \text{meet } Y \cap \text{join } Y - \{E, \emptyset\}$ は明らか。 $Y \in \text{meet } Y \cap \text{join } Y - \{E, \emptyset\}$ とすれば、 $\exists Y_1, Y_2 \subset Y - \{E, \emptyset\} \quad Y = \cap Y_1 = \cup Y_2$ であるから $Y_1 \in Y_1, Y_2 \in Y_2$ に対して $Y_2 \subset Y \subset Y_1$ となる。(5) と同様にして $Y \in Y$ を得る。(証明終)

(注意) $\text{meet } \{E\}$ の最小の閉基, $\text{join } \{\emptyset\}$ の最小の閉基はいずれも空なる族である。

定義 交完備である全非連結な閉基をもつ集合族を b-交完備 と呼び、双対的に、結完備である全非連結な閉基をもつ集合族を b-結完備 と呼ぶことにする。

[b-交完備, b-結完備のbは base の意である]

命題5

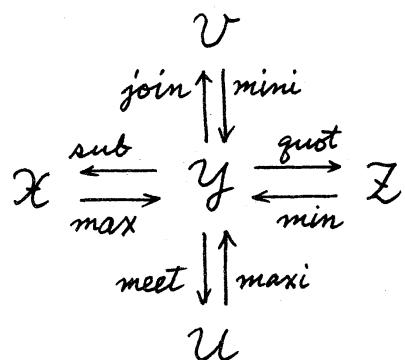
(1) U が b -交完備とは $\text{meet} \cdot \text{maxi } U = U$ であること，“
 $U \neq \{\emptyset\}$ ならば $\text{maxi } U$ は U の最小の固基である。

(2) U が b -結完備とは $\text{join} \cdot \text{mini } U = U$ であること，“
 $U \neq \{\emptyset\}$ ならば $\text{mini } U$ は U の最小の固基である。

証明 定義および命題4(3), (4) より明らか。(証明終)

命題2, 4, 5 の意味で，全非連結な集合族は“特異な場合”
 を除いて，下に固，上に固， b -交完備， b -結完備な集合族と
 それぞれ1対1に対応し，

$\text{sub} \Leftarrow \text{max}$, $\text{quot} \Leftarrow \text{min}$,
 $\text{meet} \Leftarrow \text{maxi}$, $\text{join} \Leftarrow \text{mini}$
 はそれぞれ逆の作用子である。



“特異な場合”とは

$\text{maxi} \cdot \text{meet} \{\emptyset\} = \emptyset$, $\text{mini} \cdot \text{join} \{\emptyset\} = \emptyset$
 であることを指す。($\{\emptyset\}$ と $\{\emptyset\}$ は自明な全非連結集合族)

命題6

(1) X が下に固ならば， X^c , X^r は上に固

(2) Z が上に固ならば， Z^c , Z^r は下に固

(3) U が $(b-)$ 交完備ならば， U^r は $(b-)$ 結完備

(4) U が $(b-)$ 結完備ならば, U^r は $(b-)$ 交完備

(5) Y が全非連結ならば, Y^r も全非連結

証明 命題 1 (3.5), (3.6), (5), (6) より明らか。 (証明終)

全非連結な集合族 Y_i から定義される集合族

$$Y_{i+1} = \max(\text{quot } Y_i)^c, \quad Y_{i-1} = \min(\text{sub } Y_i)^c$$

は再び全非連結な集合族となる。 E が有限集合であるから、全非連結な集合族の列 Y_i, Y_i^r ($i = 0, \pm 1, \dots$) は周期列をなす (図 1)。 $E = \{1, 2, 3, 4\}$ のときの 1 つの周期列の例を図 2

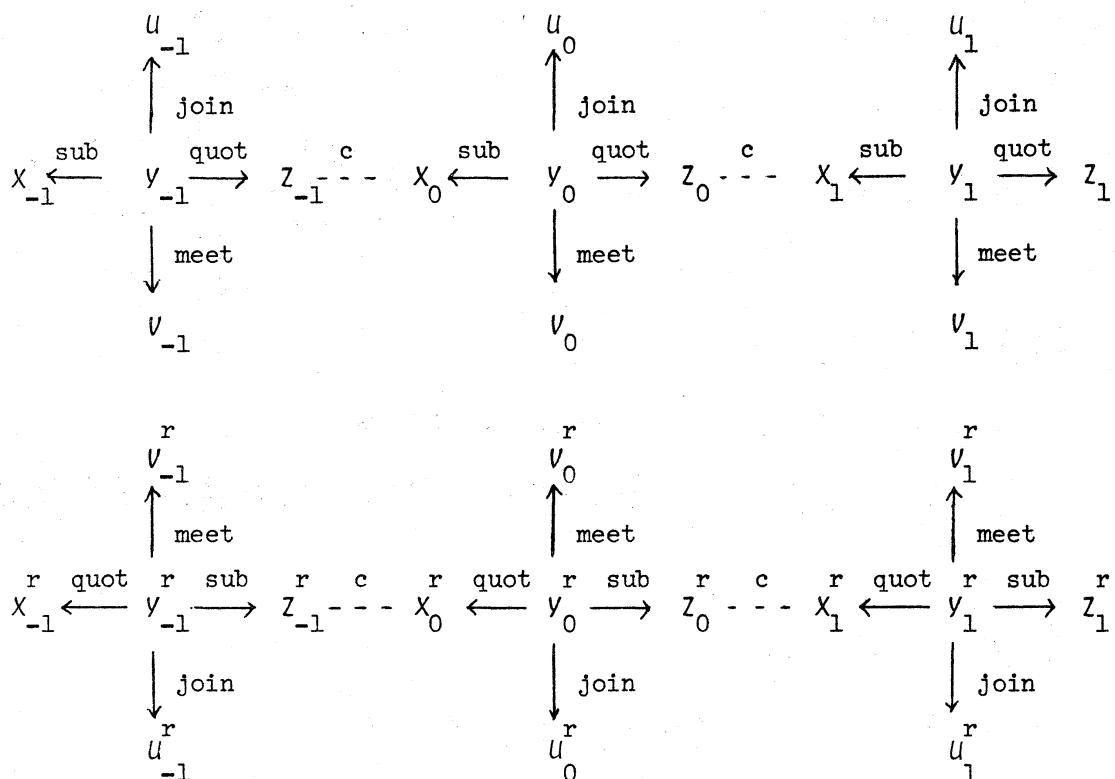


図 1

に示す（図中、123 は部分集合 $\{1, 2, 3\}$ を、(E) はすべての元集合の集まりを表す）。四角で囲ってある全非連結な集合族はマトロイドの基族をなすもので、対応する南路マトロイドをその下にグラフで表してある）。

2.2 マトロイド集合族の間の関係

前節の結果を利用してマトロイド間に関連する集合族の間の関係を体系的に述べることができきるが、その際に

W_M : 非スパン集合（基を含まない集合）の族
を考察の対象に加えておくのがよいことがわかる（この集合族は従来ほとんど注目されなかつたものである）。

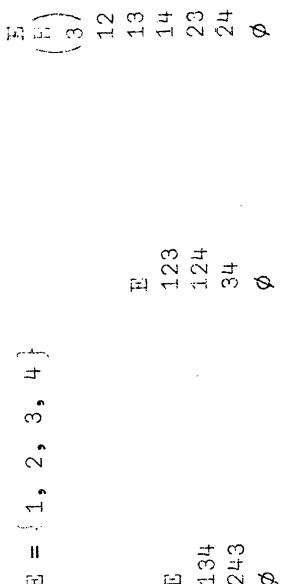
マトロイド M に関連する次の 18 種類の集合族

$$\begin{array}{cccccccccc} J_M & C_M & D_M & U_M & B_M & S_M & W_M & \mathcal{A}_M & \mathcal{F}_M \\ J_M^r & C_M^r & D_M^r & U_M^r & B_M^r & S_M^r & W_M^r & \mathcal{A}_M^r & \mathcal{F}_M^r \end{array}$$

[記号については 1.2 参照のこと]

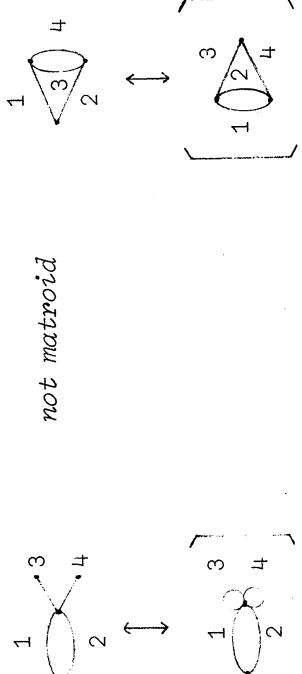
をマトロイド集合族と総称する。後半の 9 種類を特に“反転集合族”と呼ぶことにする。 B_M^r は M の補基族、 \mathcal{A}_M^r は M のコサーキット（初等切断集合）族に相当するが、それ以外の反転集合族は M に関連するものとしてはあまり積極的に利用されていない。マトロイド集合族を上記の 18 種類に限定すべき必然的な理由は何もないが、当面そのようにしておく。

$$\mathbb{E} = \{1, 2, 3, 4\}$$



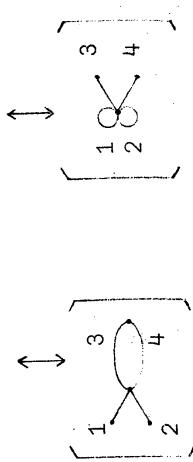
E	134	234	34	12	1	2	ϕ
-----	-----	-----	----	----	---	---	--------

not matroid



3

 1 2 3 4
not matroid



16

マトロイド集合族に関する次の2つの作用子 ($2^E \rightarrow 2^E$) を導入しておく (Xを任意のマトロイド集合族とする)。

$$\mathcal{X}_M^* = \mathcal{X}_{M^*} \quad (M^* \text{における集合族 } X)$$

$$\mathcal{X}_M^\# = \mathcal{X}_{M^*}^r \quad (M^* \text{における集合族 } X^r)$$

[M^* は M の双対マトロイドである (1.3)]

定義より、明らかに $\mathcal{X}_M^{**} = \mathcal{X}_M$, $\mathcal{X}_M^{\#\#} = \mathcal{X}_M$, $\mathcal{X}_M^\# = \mathcal{X}_M^{r*} = \mathcal{X}_M^{*r}$ である。また、 $B^\# = B$, $\mathcal{J}^\# = \mathcal{J}$, $\mathcal{D}^\# = \mathcal{W}$, $C^\# = \mathcal{H}$, $\mathcal{T}^\# = \mathcal{T}$ である。

命題7 X を任意のマトロイド集合族とする。

(1) X^r の公理系は $X^\#$ の公理系と全く同一である。

たとえば、 \mathcal{J}^r の公理系は \mathcal{J} の公理系に等しい。

(2) $X^\#$ の公理系は X の公理系と集合論的に双対である。

たとえば、 \mathcal{J} の公理系と \mathcal{J} の公理系は互いに双対的。

証明 (1) 定義 $\mathcal{X}_M^\# = \mathcal{X}_{M^*}^r$ により明らか。

(2) $X \in \mathcal{X}_M^\# \Leftrightarrow E_M X \in \mathcal{X}_M^{*r} = \mathcal{X}_M^* = \mathcal{X}_{M^*}$ であるから、

$X^\#$ の公理系は X の公理系における $\emptyset(E)$, $X \cup Y$ ($X \cap Y$), $X \subset Y$ ($X \supset Y$) をそれぞれ $E(\emptyset)$, $X \wedge Y$ ($X \vee Y$), $X \supset Y$ ($X \subset Y$) で置き換えたものと等しい。

\inf, \sup ; 直前, 直後も置き換わる。 (証明終)

(注意) したがって, B の公理系は自己双対的である。

命題7 (1) の理由により以下では“反転集合族”に関する記述を省略することが多い。

命題8 各マトロイド集合族は次の性質をもつ。

(1) C_M, B_M, \mathcal{A}_M は全非連結

(2) $\mathcal{J}_M, \mathcal{W}_M$ は下に閉, $\mathcal{D}_M, \mathcal{S}_M$ は上に閉

(3) \mathcal{J}_M は b -結完備, \mathcal{F}_M は b -交完備

証明 これらは各集合族によるマトロイドの公理の一部を前節で導入した用語で記述したにすぎない。 (証明終)

(注意) b -結完備, b -交完備であるための条件の記述は後述のマトロイド条件からみよう。

命題8に述べられた条件を各マトロイド集合族に関する「3条件」と呼ぶことにする。

命題9 各マトロイド集合族の間に次のようなる関係がある。

(1) B_M は \mathcal{J}_M の最小の上基, \mathcal{S}_M の最小の下基

$$\mathcal{J}_M = \text{sub } B_M, \quad \mathcal{S}_M = \text{quot } B_M$$

$$B_M = \max \mathcal{J}_M = \min \mathcal{S}_M, \quad B_M = \mathcal{J}_M \cap \mathcal{S}_M$$

(2) C_M は \mathcal{D}_M の最小の下基, \mathcal{F}_M の最小の開基

$$\mathcal{D}_M = \text{quot } C_M, \quad \mathcal{I}_M = \text{join } C_M$$

$$C_M = \min \mathcal{D}_M = \max_i \mathcal{I}_M, \quad C_M \subset \mathcal{D}_M \cap \mathcal{I}_M$$

(2)[#] \mathcal{H}_M は W_M の最小の上基, \mathcal{F}_M の最小の下基

$$W_M = \text{sub } \mathcal{H}_M, \quad \mathcal{F}_M = \text{meet } \mathcal{H}_M$$

$$\mathcal{H}_M = \max W_M = \max_i \mathcal{F}_M, \quad \mathcal{H}_M \subset W_M \cap \mathcal{F}_M$$

(3) \mathcal{J}_M と \mathcal{D}_M は互いに補集合族である。

$$\mathcal{J}_M = \mathcal{D}_M^c, \quad \mathcal{D}_M = \mathcal{J}_M^c, \quad \mathcal{J}_M \cup \mathcal{D}_M = 2^{E_M}$$

(3)[#] \mathcal{S}_M と W_M は互いに補集合族である。

$$\mathcal{S}_M = W_M^c, \quad W_M = \mathcal{S}_M^c, \quad \mathcal{S}_M \cup W_M = 2^{E_M}$$

証明 これらは各集合族の相互定義の関係を前節で導入し

用語で記述したにすぎない。 (証明終)

命題9に述べられた相互関係により各マトロイド集合族を
図1の周期列上に次のように配置させることができる(図3
— B_M を Y_0 の位置に, \mathcal{J}_M を Z_0 , \mathcal{S}_M を Z_0 の位置に, ---
 \mathcal{I}_M は U_{-1} の位置, \mathcal{F}_M は U_1 の位置に置く)。

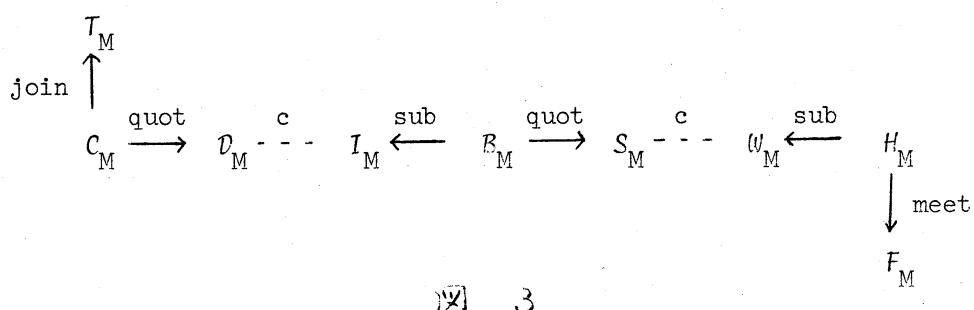


図 3

命題9の関係で（あるいは図3の“とき配置”）9(18)種類の集合族が相互に関連している状態を「マトロイド連続」と呼ぶことにする。

図3の中の任意の集合族から他のすべての集合族が一意に決定されるためには、前節で述べた「特異な場合」を除外する必要がある。このために各集合族に要求される条件をマトロイド集合族に関する「オ1条件（または非特異条件）」と呼ぶことにする。

命題10 各マトロイド集合族に関するオ1条件は次の通り

$$(1) B_M \neq \emptyset$$

$$(2) J_M \neq \emptyset \quad (\Leftrightarrow J_M \ni \emptyset) \quad (2)^{\#} S_M \neq \emptyset \quad (\Leftrightarrow S_M \ni E)$$

$$(3) D_M \neq 2^E \quad (\Leftrightarrow D_M \ni \emptyset) \quad (3)^{\#} W_M \neq 2^E \quad (\Leftrightarrow W_M \ni E)$$

$$(4) C_M \neq \{\emptyset\} \quad (\Leftrightarrow C_M \ni \emptyset) \quad (4)^{\#} A_M \neq \{E\} \quad (\Leftrightarrow A_M \ni E)$$

$$(5) T_M \text{ に廻してはなし} \quad (5)^{\#} F_M \text{ に廻してはなし}$$

「オ1条件」を満たす集合族の組が「マトロイド連続」されているとき、これらのオ2条件は互いに同値である。

証明 $y_1 = \max(\text{quot } y_0)^c = \max(\text{quot}(\max(\text{quot } y_{-1})^c)^c$

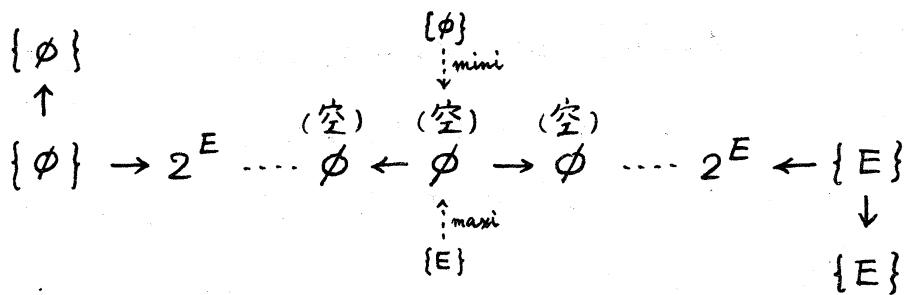
a) 廻係から、 $y_1 \neq \{E\}$ と $y_{-1} \neq \{\emptyset\}$ は同値である。

$U_{-1} = \{\emptyset\}$ に対しては $y_{-1} = \min\{\emptyset\} = \emptyset$ であるからオ2条件は自然に満たされている ($V_1 = \{E\}$ についても同

様)。

(証明終)

すなはち、オ₂条件は次のようす“特異な配置”を除外するためだけの条件である。



ある集合族が「オ₁条件」と「オ₂条件」を満たすことはマトリイド集合族であるための必要条件であるが、もちろん十分条件ではない。のためにさらに要求される条件こそ、マトリイド理論の本質的な部分である。この条件を「オ₃条件」またはマトリイド条件と総称することにする。

命題11 各マトリイド集合族に関するマトリイド条件は次の通りである。

$$(1) \mathcal{B}_M: \forall B_1, B_2 \in \mathcal{B}_M \quad B_1 \neq B_2$$

$$\Rightarrow \exists b_1 \in B_1 - B_2 \quad \exists b_2 \in B_2 - B_1$$

$$B_1 \cup \{b_2\} - \{b_1\} \in \mathcal{B}_M, B_2 \cup \{b_1\} - \{b_2\} \in \mathcal{B}_M$$

$$(2) \mathcal{J}_M: \forall I_1, I_2 \in \mathcal{J}_M \quad |I_1| < |I_2|$$

$$\Rightarrow \exists x \in I_2 - I_1 \quad I_1 \cup \{x\} \in \mathcal{J}_M$$

(z)[#] \mathcal{S}_M : $\forall S_1, S_2 \in \mathcal{S}_M \quad |S_1| < |S_2|$

$$\Rightarrow \exists x \in S_2 - S_1 \quad S_2 - \{x\} \in \mathcal{S}_M$$

(3) \mathcal{D}_M : $\forall D_1, D_2 \in \mathcal{D}_M \quad \forall x \in D_1 \cup D_2 \quad D_1 \cap D_2 \notin \mathcal{D}_M$

$$\Rightarrow D_1 \cup D_2 - \{x\} \in \mathcal{D}_M$$

(3)[#] \mathcal{W}_M : $\forall W_1, W_2 \in \mathcal{W}_M \quad \forall x \notin W_1 \cap W_2 \quad W_1 \cup W_2 \notin \mathcal{W}_M$

$$\Rightarrow (W_1 \cap W_2) \cup \{x\} \in \mathcal{W}_M$$

(4) \mathcal{C}_M : $\forall C_1, C_2 \in \mathcal{C}_M \quad \forall x \in C_1 \cap C_2 \quad C_1 \neq C_2$

$$\Rightarrow \exists C_3 \in \mathcal{C}_M \quad C_3 \subset C_1 \cup C_2 - \{x\}$$

(4)[#] \mathcal{H}_M : $\forall H_1, H_2 \in \mathcal{H}_M \quad \forall x \notin H_1 \cup H_2 \quad H_1 \neq H_2$

$$\Rightarrow \exists H_3 \in \mathcal{H}_M \quad H_3 \supset (H_1 \cap H_2) \cup \{x\}$$

(5) \mathcal{T}_M : (i) $\forall T_1, X, T_2 \in \mathcal{T}_M \quad T_1 \subset X \subset T_2$

$$\Rightarrow \exists Y \in \mathcal{T}_M \quad T_1 = \inf\{X, Y\}, \quad T_2 = X \cup Y$$

(ii) $\forall x \in E_M \quad T(x) = 'E_M - \{x\} \text{ に含まれる極大 } T\text{-フラット}'$

$$\Rightarrow T(x) = \cup \mathcal{T}_M \quad \nexists T \text{ は } T(x) \in \cup \mathcal{T}_M$$

(iii) $\forall T_1, T_2 \in \mathcal{T}_M \quad T_1, T_2 \leq T_1 \cup T_2$

$$\Rightarrow \inf\{T_1, T_2\} \leq T_1, T_2$$

(5)[#] \mathcal{F}_M : (i) $\forall F_1, X, F_2 \in \mathcal{F}_M \quad F_1 \subset X \subset F_2$

$$\Rightarrow \exists Y \in \mathcal{F}_M \quad F_1 = X \cap Y, \quad F_2 = \sup\{X, Y\}$$

(ii) $\forall x \in E_M \quad F(x) = '\{x\} を含む極小フラット'$

$$\Rightarrow F(x) = \cap \mathcal{F}_M \quad \nexists F \text{ は } F(x) \geq \cap \mathcal{F}_M$$

(iii) $\forall F_1, F_2 \in \mathcal{F}_M \quad F_1 \cap F_2 \leq F_1, F_2$

$$\Rightarrow F_1, F_2 \leq \sup \{F_1, F_2\}$$

[(5), (5)[#] における記号 \inf, \sup, \leq, \geq は東に) 契するもので、 $X \leq Y$ は ‘Y は X の直後の元である’ ことを表わす]

オ1条件、オ2条件を満たしていける一組の集合族がマトロイド連続されているとき、以上のマトロイド条件は互いに同値である。

証明 これらはいずれもマトロイド理論の基本的な定理である。適当な文献^{[3], [5]}を参照されたい。(証明終)

(注意) フラット族に) 契するマトロイド条件の (i) は子が交完備であるときさらに b-交完備であることを保証するための十分条件である。ただし、b-交完備な集合族は必ずしも条件 (i) を満たさないから、(i) はマトロイド条件の一部を構成している。T-フラット族 T についても同様。

以下で述べる諸命題はほとんどマトロイド条件を考慮せず証明される。これらの命題がマトロイド理論のものとなり得るのは、この命題 11 による。

なお、各マトロイド集合族によってマトロイドを定義する公理系は以上に述べた ‘オ1条件、オ2条件、オ3条件 (マトロイド条件)’ で構成される。(あとがきの後に対照表あり)

[3] マトロイドの圏

3.1 対応と写像

集合 E_1, E_2 の直積集合 $E_1 \times E_2$ の部分集合 α を 始域 E_1 から 終域 E_2 への対応と呼び、 $\alpha: E_1 \rightarrow E_2$ と表わす。このとき、

$$\forall x \in E_1 \quad \alpha x = \{y; (x, y) \in \alpha\} \subset E_2$$

$$\forall X \subset E_1 \quad \alpha X = \bigcup_{x \in X} \alpha x \subset E_2 \quad (\text{特に } \alpha \emptyset = \emptyset)$$

$$\forall X \subset 2^{E_1} \quad \alpha X = \{\alpha x; x \in X\} \subset 2^{E_2}$$

と定義し、それぞれ α は x, X, X の像と呼ぶ。

明らかに次の事実が成り立つ ($X, Y \subset E_1; x, y \subset 2^{E_1}$):

$$1) \quad \alpha(X \cup Y) = \alpha X \cup \alpha Y$$

$$2) \quad \alpha(X \cap Y) \subset \alpha X \cap \alpha Y$$

$$3) \quad X \subset Y \text{ ならば } \alpha X \subset \alpha Y$$

$$4) \quad X \subset Y \text{ ならば } \alpha X \subset \alpha Y$$

対応 α に対して、 $\alpha^{-1} = \{(y, x); (x, y) \in \alpha\}$ を α の逆対応と呼ぶ。 $\alpha^{-1}: E_2 \rightarrow E_1$ であり、 $(\alpha^{-1})^{-1} = \alpha$ である。

α の終域と β の始域が一致するとき、 α と β の合成

$$\beta \alpha = \{(x, z); \exists y \quad (x, y) \in \alpha \text{ かつ } (y, z) \in \beta\}$$

が定義され、結合法則 $\gamma(\beta\alpha) = (\gamma\beta)\alpha$ が成り立つ。

$$1_E = \{(x, x); x \in E\} : E \rightarrow E \quad (\text{対角集合})$$

を E 上の恒等対応 (または恒等写像) と呼ぶ。(前後関係から E を明示する必要のないときは 1_E を単に 1 と記す)

$$\alpha 1 = \alpha, 1\beta = \beta, 1^{-1} = 1$$

である。一般に α , $\alpha^{-1}\alpha \neq 1$ である。

$$\theta_{E_1, E_2} = \emptyset \subset E_1 \times E_2 : E_1 \rightarrow E_2$$

を E_1 から E_2 への 空対応 と呼ぶ (E_1, E_2 を明示する必要のないときは単に θ と記す)。 $\alpha\theta = \theta$, $\theta\alpha = \theta$, $\theta^{-1} = \theta$ である。

対応 $\alpha : E_1 \rightarrow E_2$ において、

$$D_\alpha = \{x; |\alpha x| \geq 1\} = \alpha^{-1}E_2 \quad \text{を } \alpha \text{ の } \underline{\text{定義域}},$$

$$R_\alpha = \{y; |\alpha^{-1}y| \geq 1\} = \alpha E_1 \quad \text{を } \alpha \text{ の } \underline{\text{値域}}$$

と呼ぶ。 $D_\alpha = R_{\alpha^{-1}}$, $R_\alpha = D_{\alpha^{-1}}$ である。

対応の特別なものを次のようには呼びこむこととする：

$$\forall x \in E_1 \quad |\alpha x| \leq 1 \quad \text{のとき } \alpha \text{ を } \underline{\text{半写像}}$$

$$\forall x \in E_1 \quad |\alpha x| \geq 1 \quad (D_\alpha = E_1) \quad \text{のとき } \alpha \text{ を } \underline{\text{準写像}}$$

$$\forall y \in E_2 \quad |\alpha^{-1}y| \leq 1 \quad \text{のとき } \alpha \text{ を } \underline{\text{单対応}}$$

$$\forall y \in E_2 \quad |\alpha^{-1}y| \geq 1 \quad (R_\alpha = E_2) \quad \text{のとき } \alpha \text{ を } \underline{\text{全対応}}$$

半写像かつ準写像である対応 α ($\forall x \in E_1, |\alpha x| = 1$) を 写像

である。

α : 半写像 $\Leftrightarrow \alpha^{-1}$: 单対応, α : 準写像 $\Leftrightarrow \alpha^{-1}$: 全対応

である。

上記の定義から直ちに次の命題が導かれる。

命題12 $\alpha: E_1 \rightarrow E_2$, $X \subset E_1$, $Y \subset E_2$ とする。

- (1) α が“半写像”ならば, $\alpha \alpha^{-1} Y \subset Y$, $(\alpha^{-1} Y)^c \supset \alpha^{-1} Y^c$
- (2) α が“準写像”ならば, $\alpha^{-1} \alpha X \supset X$, $(\alpha^{-1} Y)^c \subset \alpha^{-1} Y^c$
- (3) α が“單対応”ならば, $\alpha^{-1} \alpha X \subset X$, $(\alpha X)^c \supset \alpha X^c$
- (4) α が“全対応”ならば, $\alpha \alpha^{-1} Y \supset Y$, $(\alpha X)^c \subset \alpha X^c$

対応の性質と集合族の性質を組み合わせて次の命題を得る。

命題13 $\alpha: E_1 \rightarrow E_2$, $X \subset 2^{E_1}$, $Y \subset 2^{E_2}$ とする。

- (1) α が“半写像”, X, Y が上に閉ならば
 $\alpha X \subset Y \Rightarrow \alpha^{-1} Y^c \subset X^c$; $\alpha^{-1} Y \subset X \Rightarrow \alpha^{-1} Y^c \subset X^c$
- (2) α が“準写像”, X が下に閉 (Y は任意) ならば
 $\alpha^{-1} Y \subset X \Rightarrow \alpha X^c \subset Y^c$; $\alpha^{-1} Y \subset X \Rightarrow \alpha^{-1} Y^c \subset X^c$
- (3) α が“單対応”, X, Y が上に閉ならば
 $\alpha^{-1} Y \subset X \Rightarrow \alpha X^c \subset Y^c$; $\alpha X \subset Y \Rightarrow \alpha X^c \subset Y^c$
- (4) α が“全対応”, Y が下に閉 (X は任意) ならば
 $\alpha X \subset Y \Rightarrow \alpha^{-1} Y^c \subset X^c$; $\alpha X \subset Y \Rightarrow \alpha X^c \subset Y^c$

証明 (1) 前半。 $\exists Y \in Y^c \quad \alpha^{-1} Y \notin X^c$ とする。 $X = \alpha^{-1} Y$ を

おけば “ $X \in X$, かつ $\alpha X = \alpha \alpha^{-1} Y \subset Y \in Y^c$ ”。 Y^c は下に閉であるから $\alpha X \in Y^c$, すなはち $\alpha X \notin Y$ 。

(2) 後半。 $\exists Y \in Y \quad \alpha^{-1} Y^c \notin X^c$ とする。 $\alpha^{-1} Y^c \subset (\alpha^{-1} Y)^c$,

α^r は下に閉であるから $(\alpha^{-1}Y)^c \notin \alpha^r$, すなはち $\alpha^{-1}Y \notin \alpha$. 他の証明も同様。 (証明終)

3.2 マトロイドの圏の定義

α を一般にマトロイド集合族とするととき, この集合族に属する集合を α -集合 と呼ぶ。たとえば, \emptyset -集合と $\{I\}$ -独立集合のことである。マトロイド M に関する α -集合全体からなる集合族を \mathcal{X}_M と記す (I, \emptyset が \mathcal{I}_M など)。

2つのマトロイド M, N に関する台集合 E_M, E_N の間の対応 $\alpha: E_M \rightarrow E_N$ が次の性質

$\forall X \in \mathcal{X}_M \quad \alpha X \in \mathcal{X}_N$, すなはち, $\alpha \mathcal{X}_M \subset \mathcal{X}_N$ を満たすとき, α は α -集合を 順保存するといふ。同様に,
 $\forall Y \in \mathcal{X}_N \quad \alpha^{-1}Y \in \mathcal{X}_M$, すなはち, $\alpha^{-1}\mathcal{X}_N \subset \mathcal{X}_M$ であるとき, α は α -集合を 逆保存するといふ。順保存と逆保存を総称して单に保存といふ。

(1) $\text{Mat}(\vec{\alpha})$ と $\text{Mat}(\overleftarrow{\alpha})$

対象のクラスをすべてのマトロイドの集まり M とし, 射を α -集合を保存するマトロイド間の対応とし, 射の合成は対応の合成, 恒等射の恒等対応とすれば, 圈の公理 (1.1) が満たされる。対応による α -集合の保存が順保存か逆保存かに従ってこの圏をそれぞれ $\text{Mat}(\vec{\alpha})$, $\text{Mat}(\overleftarrow{\alpha})$ で表わす。たとえば, $\text{Mat}(\vec{\alpha})$ はマトロイド間で独立集合を順保存する対

応を射とする圏である。

$\text{Mat}(\vec{\mathcal{X}})$ と $\text{Mat}(\vec{\mathcal{X}})$ とに共通に成り立つ性質を述べた後、文脈上、保存の方向の順逆が前後で対応することを意味するとき、しばしば $\text{Mat}(\overleftrightarrow{\mathcal{X}})$ という記号を用いる。

$\text{Mat}(\overleftrightarrow{\mathcal{X}})$ において、 M から N への射の全体からなる集合を $\vec{\mathcal{X}}[M, N]$ で表す。たとえば、 $\vec{\mathcal{J}}[M, N]$ はマトロイド M から N への対応で独立集合を順保存するものの全体の集合である。

$$\vec{\mathcal{J}}[M, N] = \{ d ; d : E_M \rightarrow E_N, d|_M \subset J_N \}$$

(2) $\text{mat}(\vec{\mathcal{X}})$ と $\text{mat}(\overleftrightarrow{\mathcal{X}})$

同様にして、すべてのマトロイドの集まり \mathcal{M} を対象とし、 \mathcal{M} -集合を保存する写像を射としても圏が定義される。これを $\text{mat}(\vec{\mathcal{X}})$, $\text{mat}(\overleftrightarrow{\mathcal{X}})$ で表す。矢印の意味は (1)と同じ。

$\text{mat}(\overleftrightarrow{\mathcal{X}})$ において、 M から N への射の全体からなる集合を $\vec{\mathcal{X}}\langle M, N \rangle$ で表す。たとえば、 $\vec{\mathcal{J}}\langle M, N \rangle$ はマトロイド M から N への写像で独立集合を順保存するものの全体の集合である。明らかに、 $\vec{\mathcal{X}}[M, N]$ から写像だけを集めたものが $\vec{\mathcal{X}}\langle M, N \rangle$ であり、 $\forall M, N \in \mathcal{M} \quad \vec{\mathcal{X}}\langle M, N \rangle \subset \vec{\mathcal{X}}[M, N]$ である。

3.3 圈の相等、同型、部分圏、双対圏

一般に、2つの圏 $C_1 = (\mathcal{O}_1, \mathcal{M}_1)$, $C_2 = (\mathcal{O}_2, \mathcal{M}_2)$ が 相等し $\Leftrightarrow (C_1 = C_2)$ とは、 $\mathcal{O}_1 = \mathcal{O}_2$ かつ $\forall (A, B) \in \mathcal{O}_1 \times \mathcal{O}_1$ に対して

$M_1[A, B] = M_2[A, B]$ であることをいう。

C_1 と C_2 が 同型である ($C_1 \simeq C_2$) とは、1対1対応 $\varphi: \mathcal{O}_1 \rightarrow \mathcal{O}_2$, $\varphi: M_1 \rightarrow M_2$ が存在し, $\forall \alpha \in M_1[A, B]$ は $\varphi(\alpha) \in M_2[\varphi(A), \varphi(B)]$ であり, $\varphi(\beta\alpha) = \varphi(\beta)\varphi(\alpha)$ が成り立つこという。

C_1 と C_2 が 部分圏 ($C_1 \subset C_2$) であるとは, $\mathcal{O}_1 \subset \mathcal{O}_2$ かつ $\forall (A, B) \in \mathcal{O}_1 \times \mathcal{O}_1$ は $\exists \alpha \in M_1[A, B] \subset M_2[A, B]$ であることをいう。

圏 $C = (\mathcal{O}, M)$ は閉じて, $\forall (A, B) \in \mathcal{O} \times \mathcal{O}$ は $\exists \alpha \in M^*[A, B] = M[B, A]$ とすれば, (\mathcal{O}, M^*) は圏となる。これを C の 双対圏 と呼ぶ, C^* で表わす。明らかに $(C^*)^* = C$ である。

命題14 \mathfrak{X} を任意のマトリイド集合族とする。

$$(1) \text{ mat}(\overleftrightarrow{\mathfrak{X}}) \subset \text{Mat}(\overleftrightarrow{\mathfrak{X}})$$

$$(2) \text{ Mat}(\overrightarrow{\mathfrak{X}})^* \simeq \text{Mat}(\overleftarrow{\mathfrak{X}}), \quad \text{Mat}(\overleftarrow{\mathfrak{X}})^* \simeq \text{Mat}(\overrightarrow{\mathfrak{X}})$$

$$(3) \text{ Mat}(\overrightarrow{\mathfrak{X}}) \simeq \text{Mat}(\overleftrightarrow{\mathfrak{X}}^{#r}), \quad \text{mat}(\overleftrightarrow{\mathfrak{X}}) \simeq \text{mat}(\overleftrightarrow{\mathfrak{X}}^{#r})$$

証明 (1) $\overleftrightarrow{\mathfrak{X}}[M, N] \subset \overleftrightarrow{\mathfrak{X}}[M, N]$ のこと。

$$(2) \alpha \in \overrightarrow{\mathfrak{X}}[M, N] \text{ は } \alpha \mathfrak{X}_M = (\alpha^{-1})^{-1} \mathfrak{X}_M \subset \mathfrak{X}_N$$

$$\text{ゆえに } \alpha^{-1} \in \overleftarrow{\mathfrak{X}}[N, M]$$

$$(3) \mathfrak{X}_M = \mathfrak{X}_{M^*}^{#r} \text{ であるから。} T = \text{ヒミツ}, J_M = S_{M^*}^r.$$

[この関係により 反転集合族についての記述を省略することは前にも述べた(命題7(1))] (証明終)

命題15

$$(1) \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{C}) \subset \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{B}), \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{C}) \subset \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{B})$$

$$\text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{C}) \subset \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{J}), \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{C}) \subset \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{J})$$

要するに、サーキットを保存する対応(写像)は従属集合およびT-フラットを保存すること。

$$(2) \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{B}) \subset \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{S}), \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{B}) \subset \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{S})$$

$$\text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{B}) \subset \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{J}), \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{B}) \subset \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{J})$$

$$(3) \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{\mathcal{H}}) \subset \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{W}), \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{\mathcal{H}}) \subset \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{W})$$

証明 $\mathcal{X} = \text{sub } Y$ ($Y = B, \mathcal{H}$ に対して $\mathcal{X} = \mathcal{J}, W$) のときには

$$\text{Mat}(\vec{Y}) \subset \text{Mat}(\vec{X}), \text{mat}(\vec{Y}) \subset \text{mat}(\vec{X})$$
 を示す。

$$\alpha \in \vec{Y}[M, N], f \in \vec{Y}\langle M, N \rangle$$
 とする。 $X \in \mathcal{X}_M = \text{sub } Y_M$

とすれば $\exists Y \in Y_M \quad X \subset Y$ であるから, $\alpha X \subset \alpha Y \in Y_N$,

$fX \subset fY \in Y_N$ となる。ゆえに, $\alpha X, fX \in \text{sub } Y_N = \mathcal{X}_N$ 。

したがって, $\alpha \in \vec{X}[M, N], f \in \vec{X}\langle M, N \rangle$ である。

同様にして, $Z = \text{quot } Y, U = \text{join } Y$ の条件を用いて他の関係を導くことができる。逆保存も同様。(証明終)

(注意) 一般には, $\text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{\mathcal{H}}) \subset \text{Mat}(\overset{\leftrightarrow}{\mathcal{R}}), \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{\mathcal{H}}) \subset \text{mat}(\overset{\leftrightarrow}{\mathcal{R}})$ は成立立たない ($\mathcal{R} = \text{meet } \mathcal{H}, \alpha(\cap Y) \subset \cap \alpha Y$ である)。

命題16

$$(1) \text{mat}(\overleftarrow{\mathcal{J}}) = \text{mat}(\overrightarrow{\mathcal{D}})$$

すなはち、写像が独立集合を逆保存するここと従属集合を順保存することは同値である。(以下同様)

$$\text{mat}(\overleftarrow{w}) = \text{mat}(\overrightarrow{s})$$

$$(2) \text{mat}(\overleftarrow{\mathcal{J}}) = \text{mat}(\overleftarrow{\mathcal{J}}^r), \quad \text{mat}(\overrightarrow{\mathcal{D}}) = \text{mat}(\overrightarrow{\mathcal{D}}^r)$$

$$\text{mat}(\overleftarrow{w}) = \text{mat}(\overleftarrow{w}^r), \quad \text{mat}(\overrightarrow{s}) = \text{mat}(\overrightarrow{s}^r)$$

証明 命題13 (1), (2) によると。すなはち、写像 $f: M \rightarrow N$ の半写像性より下に用いた集合族 $\mathcal{X} (\mathcal{J}, \mathcal{W}, \mathcal{D}^r, \mathcal{S}^r)$ に対して、
 $\overleftarrow{\mathcal{X}}^{c} \langle M, N \rangle \supset \overrightarrow{\mathcal{X}}^c \langle M, N \rangle$, かつ $\overleftarrow{\mathcal{X}} \langle M, N \rangle \supset \overrightarrow{\mathcal{X}}^r \langle M, N \rangle$
 であり、 f の準写像性より逆の包含関係が導かれる。

(証明終)

以上に述べた間の関係のほかに、次のものが得られて
 いるが、個別特殊的であるので結果を示すにとどめておく。

$$\text{mat}(\overrightarrow{\mathcal{J}}) \subset \text{mat}(\overleftarrow{\mathcal{X}})$$

3.4 同型射

一般に、射 $\alpha: A \rightarrow B$ に対して $\exists \alpha = 1_A$ なる \exists (α の左逆射)
 が存在すると $\exists \alpha$ は左可逆、 $\alpha \eta = 1_B$ なる η (α の右逆射)
 が存在すると $\exists \alpha$ は右可逆であるといふ。左可逆かつ右可逆
 の射 α を同型射といふ。このとき α の左逆射と右逆射は一致

し、これを α の 逆射と呼び α^{-1} で表わす。

命題17 任意のマトリオイドの園 $\text{Mat}(\vec{\mathcal{X}})$, $\text{mat}(\vec{\mathcal{X}})$ において、射 $\alpha: M \rightarrow N$ が同型射であるための必要十分条件は

- (i) $\alpha: E_M \rightarrow E_N$ は 1 対 1 対応である。
- (ii) $\alpha \mathcal{X}_M = \mathcal{X}_N \quad (\Leftrightarrow \alpha^{-1} \mathcal{X}_N = \mathcal{X}_M)$

証明 $\text{Mat}(\vec{\mathcal{X}})$ において考える (他も同様)。十分条件は明らか。必要条件であることを示す。 α が 1 対 1 対応でないときすれば、 $\forall \beta: E_N \rightarrow E_M \quad \beta \alpha \neq 1_A$ すなは $\alpha \beta \neq 1_B$ 。したがって (i) は必要条件。(ii) は $\alpha \mathcal{X}_M \subset \mathcal{X}_N \Rightarrow \alpha^{-1} \mathcal{X}_N \subset \mathcal{X}_M$ から得られる。
(証明終)

命題18 あるマトリオイド集合族 \mathcal{X} に対して、 $\alpha \in \overset{\leftrightarrow}{\mathcal{X}}[M, N]$, $f \in \overset{\leftrightarrow}{\mathcal{X}}\langle M, N \rangle$ の同型射ならば、他のすべてのマトリオイド集合族に廻しても α , f はそれぞれ同型射である。

証明 “マトリオイド連続”により他のマトリオイドの一意性が決定されることが明らか。
(証明終)

ある 1 つの (したがって、すべての) マトリオイド集合族に廻して同型射 $\alpha: M \rightarrow N$ が存在するとき、2 つのマトリオイド M, N は (α は廻して) 同型であるといい、 $M \simeq N$ と表わす。

3.5 単射と全射

一般に、射 α に廻して $\forall \beta_1, \beta_2 \quad \alpha\beta_1 = \alpha\beta_2 \Rightarrow \beta_1 = \beta_2$ であるとき、 α を 単射 と呼ぶ。双対的に、 $\forall \beta_1, \beta_2 \quad \beta_1\alpha = \beta_2\alpha \Rightarrow \beta_1 = \beta_2$ であるとき、 α を 全射 と呼ぶ。

命題19 任意のマトロイド集合族 \mathcal{X} に対して、図 $\text{IMat}(\mathcal{X})$ における射 $\alpha \in \overset{\leftrightarrow}{\mathcal{X}}[M, N]$ に廻する次の 3 つ。条件は同値である。

- (1) α は 単射
- (2) $\forall A, B \subset E_M \quad A \neq B \Rightarrow \alpha A \neq \alpha B$
- (3) $\forall x \in E_M \quad \alpha\{x\} - \alpha(E_M - \{x\}) \neq \emptyset$

証明 (1) \Rightarrow (2) を示すのが中心。他はマトロイド理論と独立に成り立つ。背理法により、 $\exists A, B \subset E_M \quad A \neq B, \alpha A = \alpha B$ を仮定して、マトロイド L と射 $\beta_1, \beta_2 \in \overset{\leftrightarrow}{\mathcal{X}}[L, M]$ で $\beta_1 \neq \beta_2$, $\alpha\beta_1 = \alpha\beta_2$ となるものを構成すればよい。次の表に、マトロイド L を示す。

\mathcal{X}	T	C	D	J	B	S	W	14	F
\rightarrowtail	$U_{1,1}$	$U_{1,1}$	$U_{1,1}$	$U_{0,1}$	$M + U_{0,1}$	$U_{2,2}$	$U_{0,1}$	$U_{0,1}$	$U_{0,2}$
$\overleftarrow{\mathcal{X}}$	$U_{0,1}$	$U_{0,2}$	$U_{0,2}$	$U_{1,1}$	(a)	$U_{0,1}$	$U_{3,3}$	(b)	$U_{1,1}$

$U_{k,m}$ は k -一様マトロイド (1.3), $M + U_{0,1}$ は M に自己周路を 1 つ添加してできるマトロイドを表す。

(a) $\text{Mat}(\overleftarrow{B})$ における L と $\beta_1, \beta_2 \in \overleftarrow{B}[L, M]$

1) $\exists a \in A \Delta B \quad \{a\} \notin \mathcal{B}_M$ のとき, $L = U_{0,1}$, $E_L = \{e\}$ として

$\beta_1 e = E_M$, $\beta_2 e = E_M - \{a\}$ とすれば $\beta_1 \neq \beta_2$ 。

2) $\forall a \in A \Delta B \quad \{a\} \in \mathcal{B}_M$ のとき, $P(M) = 1$ であるから,

$L = U_{2,4}$, $E_L = \{e_1, e_2, e_3, e_4\}$ として, $\beta_1 e_1 = \beta_2 e_2 = A$,

$\beta_1 e_2 = \beta_2 e_1 = B$, $\beta_1 e_3 = \beta_2 e_3 = E_M - A$, $\beta_1 e_4 = \beta_2 e_4 = E_M - B$

とすれば $\beta_1 \neq \beta_2$ 。

(b) $\text{Mat}(\overleftarrow{\mathbb{A}})$ における L と $\beta_1, \beta_2 \in \overleftarrow{\mathbb{A}}[L, M]$

1) $\exists a \in A \Delta B \quad \{a\} \notin \mathbb{A}_M$ のとき, $E_L = \{e_1, e_2\}$, $\mathbb{A}_L = \{e_1, e_2\}$

として, $\beta_1 e_1 = E_M$, $\beta_2 e_1 = E_M - \{a\}$, $\beta_1 e_2 = \beta_2 e_2 = \emptyset$ とすれば $\beta_1 \neq \beta_2$ 。

2) $\forall a \in A \Delta B \quad \{a\} \in \mathbb{A}_M$ のとき, $P(M) = 1$ または

(i) $P(M) = 1$ のとき, $A \Delta B = \{x\}$ (x は自己閉路), $\mathbb{A}_M = \{x\}$ があり, $E_M - \{x\}$ の要素はすべて平行であるから, $L = U_{1,1}$, $E_L = \{e\}$, $\beta_1 e = \emptyset$, $\beta_2 e = E_M - \{x\}$ とすれば $\beta_1 \neq \beta_2$ 。

(ii) $P(M) = 2$ のとき, $M = U_{2,m}$ であるから, $L = U_{3,4}$,

$E_L = \{e_1, e_2, e_3, e_4\}$ として, β_1, β_2 の定義は (a) と (b)

の場合と同じにしてみれば $\beta_1 \neq \beta_2$ 。

(2) \Rightarrow (1) も背理法。 $\alpha \beta_1 = \alpha \beta_2$, $\beta_1 \neq \beta_2$ とすると, $\exists p$

$\beta_1 p \neq \beta_2 p$. $A = \beta_1 p$, $B = \beta_2 p$ とおけば $A \neq B$, かつ

$\alpha A = \alpha B$ となる。 $(2) \Leftrightarrow (3)$ も容易である。(証明終)

命題20 任意のマトロイド集合族 \vec{x} に対して、圏 $\text{Mat}(\vec{x})$ における射 $\alpha \in \vec{x}[M, N]$ に関する次の3つの条件は同値である。

(1) α は全射

(2) $\forall C, D \in E_N \quad C \neq D \Rightarrow \alpha^{\vec{C}} \neq \alpha^{\vec{D}}$

(3) $\forall y \in E_N \quad \alpha^{-1}\{y\} - \alpha^{-1}(E_N - \{y\}) \neq \emptyset$

証明 命題19との双対性より明らか。(証明終)

命題21 $\text{mat}(\vec{C}), \text{mat}(\vec{A}), \text{mat}(\vec{B})$ を除く写像を射とする任意のマトロイドの圏 $\text{mat}(\vec{x})$ において、射 $f \in \vec{x}[M, N]$ が単射であるための必要十分条件は

$\forall x_1, x_2 \in E_M \quad x_1 \neq x_2 \Rightarrow f(x_1) \neq f(x_2)$

である。

証明 命題19と同様にマトロイド L の表を掲げておく。

\vec{x}	J	C	D	\vee	B	\wedge	\wedge	w	A	\exists
\vec{x}	$U_{1,1}$	$U_{1,1}$	$U_{1,1}$	$U_{0,1}$	$M+U_{0,1}$	$M+U_{0,1}$	$M+U_{0,1}$	$U_{0,1}$	$U_{0,1}$	$U_{0,m+1}$
\vec{x}	$U_{0,1}$			$M+U_{0,1}$	$U_{1,1}$			$U_{0,1}$	$U_{2,2}$	$U_{1,1}$

$m = |E_M|$ とする。

(証明終)

命題22 $\text{mat}(\vec{\mathcal{M}})$ を除く写像を射とする任意のマトロイドの圏 $\text{mat}(\overleftrightarrow{\mathcal{X}})$ において、射 $f \in \overleftrightarrow{\mathcal{X}}\langle M, N \rangle$ が全射であるための必要十分条件は

$$fE_M = E_N \quad (\text{すなはち}, R_f = E_N)$$

である。

証明 必要条件であることを示すには、背理法で $g_1, g_2 \in \overleftrightarrow{\mathcal{X}}\langle N, L \rangle$ $g_1 \neq g_2$ かつ $g_1 f = g_2 f$ となるものを構成すればよい。次の表にマトロイド L を示す。

\mathcal{X}	\mathcal{T}	C	D	\cup	B	\mathcal{S}	W	\mathcal{M}	\mathcal{F}
$\vec{\mathcal{X}}$	$U_{0,2}$	$N + \{p\}$	$U_{0,2}$	$U_{2,2}$	$N + \{p\}$	$U_{0,2}$	$U_{3,3}$	$U_{0,2}$	$U_{0,2}$
$\overleftrightarrow{\mathcal{X}}$	$U_{2,2}$	$U_{2,2}$	$U_{2,2}$	$U_{0,2}$	$U_{0,2} + U_{2,2}$	$U_{2,2}$	$U_{0,2}$	$U_{0,2}$	$U_{0,2}$

$N + \{p\}$ は $N = E_N - fE_M$ の任意の要素 p をもとの p と平行にするように添加してできるマトロイドを表す。

$U_{0,2} + U_{2,2}$ は閉路マトロイドで示可と ~~OK~~ となる。

十分条件であることは明らかであろう。 (証明終)

3.6 マトロイドの簡約と縮約、部分マトロイド

マトロイド M の台集合 E_M の任意の部分集合を T とする。

$\mathcal{J}_M|T = \{ I \cap T ; I \in \mathcal{J}_M \}$ とすれば $\mathcal{J}_M|T$ は独立集合族の公理を満たす。これを独立集合族とするより T 上のマトロイドを $M|T$ で表し、 M の T への簡約と呼ぶ。

双対的 \vdash , $\mathcal{S}_{M|T} = \{S \cap T; S \in \mathcal{S}_M\}$ とすれば $\mathcal{S}_{M|T}$ は入
力集合族の公理を満たす。これをスパン集合とするより T
上のマトロイドを $M|T$ で表わし, $M|T$ への簡約と呼ぶ。

マトロイド M より簡約と縮約を何度か施して得られるマト
ロイドを M のマイナーと呼ぶ。

次の事実はよく知られている。($S \subset T \subset E_M$ とする。)

$$(1) M|T = (M^* \cdot T)^* \quad (1)^* M|T = (M^*|T)^*$$

$$(2) (M|T)|S = M|S \quad (2)^* (M|T) \cdot S = M \cdot S$$

$$(3) (M|T) \cdot S = (M \cdot (E_M - (T - S)))|S$$

$$(3)^* (M|T)|S = (M|(E_M - (T - S))) \cdot S$$

集合族にに関する次の作用素 ($2^E \rightarrow 2^T$, $T \subset E$) を定義し
ておく。

$$\mathcal{X}|T = \{X \cap T; X \in \mathcal{X}\}$$

$$\mathcal{X} \circ T = \{X; X \in \mathcal{X} \text{ かつ } X \subset T\}$$

$$\mathcal{X} \star T = \{X; X \subset T \text{ かつ } X \cup T^c \in \mathcal{X}\}$$

命題23

$$(1) \mathcal{J}_{M|T} = \mathcal{J}_M \circ T, \mathcal{C}_{M|T} = \mathcal{C}_M \circ T, \mathcal{D}_{M|T} = \mathcal{D}_M \circ T,$$

$$\mathcal{J}_{M|T} = \mathcal{J}_M \circ T, \mathcal{F}_{M|T} = \mathcal{F}_M|T,$$

$$\mathcal{W}_{M|T} \subset \mathcal{W}_{M \circ T}, \mathcal{A}_{M|T} = \mathcal{A}_{M|T} - \{T\}$$

$$(2) \mathcal{F}_{M \cdot T} = \mathcal{F}_M \star T, \mathcal{A}_{M \cdot T} = \mathcal{A}_{M \star T}, \mathcal{W}_{M \cdot T} = \mathcal{W}_{M \star T},$$

$$\mathcal{S}_{M,T} = \mathcal{S}_M * T, \quad \mathcal{T}_{M,T} = \mathcal{T}_M | T,$$

$$\mathcal{J}_{M,T} \subset \mathcal{J}_M \circ T, \quad \mathcal{C}_{M,T} = \mathcal{C}_M | T - \{\emptyset\}$$

(証明略)

一般に、2つの対象 A, B に対して、 A から B への单射 α が存在するとき、 A は B の (α に関する) 部分対象 といふ。マトロイドの圏においては部分対象を 部分マトロイド と呼ぶ。

簡約 $M|T$ 、縮約 $M.T$ に廣して、恒等射 $1_M: E_M \rightarrow E_M$ の T の制限をこの節では 1_T で表わすことにする。

命題24 (1) $M|T$ は次の圏において (1_T に廣する) M の部分マトロイドである: $\text{Mat}(\cdot), \text{mat}(\cdot)$

$$\bullet = \vec{J}, \vec{w}, \vec{c}, \vec{\tau}, \vec{w}, \vec{x}$$

(2) $M.T$ は次の圏において (1_T に廣する) M の部分マトロイドである: $\text{IMat}(\cdot), \text{imat}(\cdot)$

$$\bullet = \vec{J}, \vec{w}, \vec{\tau}, \vec{x}$$

(3) したがって、 M のマイナーガ M の部分マトロイドとなるのは次の圏に限られる:

$$\text{IMat}(\vec{J}), \text{Mat}(\vec{w}); \quad \text{imat}(\vec{J}), \text{mat}(\vec{w})$$

証明 T 上のマトロイド M' が \vec{x} 、 \vec{x} の意味で部分マトロイドであるとは、それとされ、 $\mathcal{X}_{M'} \subset \mathcal{X}_{M \circ T}$, $\mathcal{X}_{M'} \cap \mathcal{X}_{M|T}$ であることにほかならぬ。命題23、および $\mathcal{W}_{M.T} \subset \mathcal{W}_{M \circ T}$ に

よって結果を得ることができる。(証明終)

3.7 E 上のマトロイドのなす順序集合

E 上のマトロイド全体の集合を $\mathcal{M}(E)$ とする。 $\mathcal{M}(E)$ の $\vec{\chi}$ のマトロイド M_1, M_2 に対して、 $\text{Mat}(\vec{\chi})$ [$\text{mat}(\vec{\chi})$] において $M_1 \prec M_2$ の部分マトロイド（恒等写像 1_E に属する）であるとき、すなはち $1_E \in \vec{\chi}[M_1, M_2]$ [$1_E \in \vec{\chi}\langle M_1, M_2 \rangle$] であるとき、 $M_1 \prec M_2$ と定義すると、 $\mathcal{M}(E)$ は順序集合となる。この順序集合を $\mathcal{M}(E, \vec{\chi})$ で表す。

$\mathcal{M}(E, \vec{\chi}), \mathcal{M}(E, \vec{\chi}^c)$ において $M_1 \prec M_2$ であることは、それだけ、 $\chi_{M_1} \subset \chi_{M_2}, \chi_{M_1} \supset \chi_{M_2}$ であることにほかならない。したがって、 $\mathcal{M}(E, \vec{\chi})$ と $\mathcal{M}(E, \vec{\chi}^c)$ は順序集合として双対的である。以下では $\mathcal{M}(E, \vec{\chi})$ だけについて述べる。

命題25 (1) $\mathcal{M}(E, \vec{\chi})$ と $\mathcal{M}(E, \vec{\chi}^c)$ は双対

(2) $\mathcal{M}(E, \vec{\chi})$ と $\mathcal{M}(E, \vec{\chi}^r)$ は同型(同一)

(3) $\mathcal{M}(E, \vec{\chi})$ と $\mathcal{M}(E, \vec{\chi}^{\#})$ は同型

たとえば、 $\mathcal{M}(E, \vec{J})$ と $\mathcal{M}(E, \vec{B})$ は双対、 $\mathcal{M}(E, \vec{J})$ と $\mathcal{M}(E, \vec{J}^r)$ および $\mathcal{M}(E, \vec{J})$ は同型。

証明 (1) $\chi_{M_1} \subset \chi_{M_2} \Leftrightarrow \chi_{M_1}^c \supset \chi_{M_2}^c$ (2) $\chi_{M_1} \subset \chi_{M_2} \Leftrightarrow \chi_{M_1}^r \subset \chi_{M_2}^r$ (3) $\chi_M^{\#} = \chi_{M^*}^r$, 同型対応 $M \leftrightarrow M^*$ を参考

れば“ \neq ”。

(証明終)

命題26 順序集合 $M(E, \vec{\succ})$ は同型、双対を除いて次の4種類に分類される。ただし、 $|E| \geq 2$ とする。

(i) $M(E, \vec{J})$ (ii) $M(E, \vec{A})$ (iii) $M(E, \vec{B})$ (iv) $M(E, \vec{C})$

証明 (i), (ii) には最大元 ($U_{m,m}$)、最小元 ($U_{0,m}$) が存在する。

(iii) には最小元 ($U_{0,m}$) はあるが最大元は存在しない。

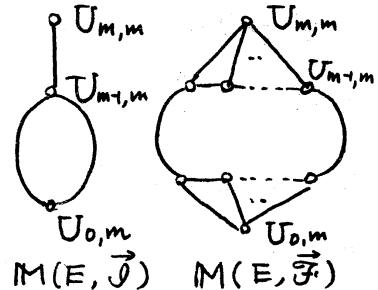
(iv) において $U_{0,m}, U_{m,m}$ は孤立元となる。

(i) では $\forall M \neq U_{m,m} \quad M \prec U_{m-1,m}$

(ii) では $P(M) = m-1$ のマトリオイド

は互いに比較可能ではない。

[$m = |E|$ とした。] (証明終)



$E = \{1, 2, 3\}$ のときの4種類の順序集合を図4に示す。

命題27 $|E| \geq 3$ のとき $M(E, \vec{\succ})$ は束をなさない。

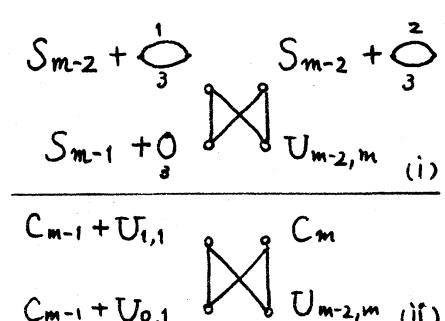
証明 命題26により (iii) と (iv) の型

の順序集合は束ではない。

(i), (ii) については Hasse 図に

右のような部分があることに

より束ではない。 $[C_m = U_{m-1,m}, S_m = U_{m,m}]$ おく] (証明終)



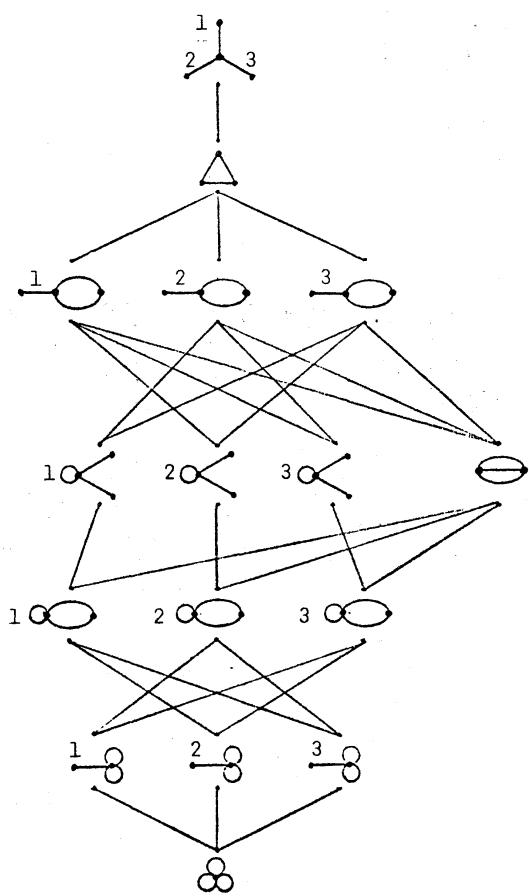
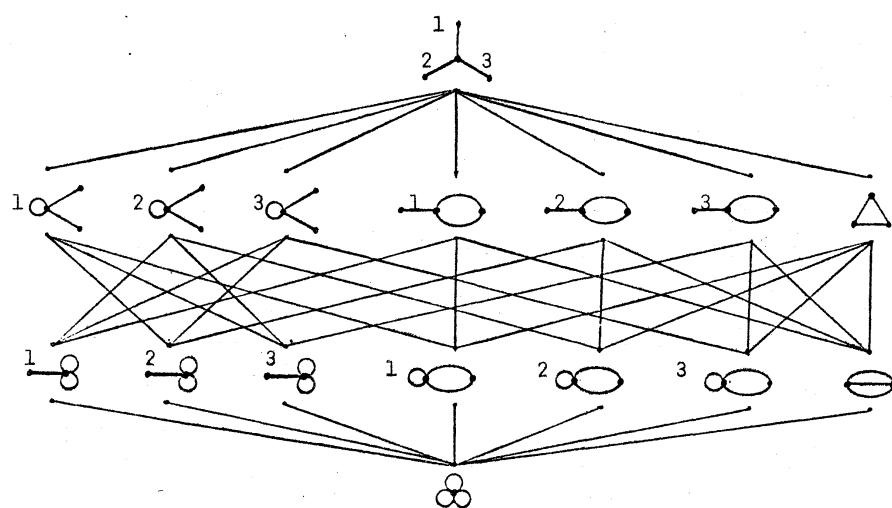
(i) $M(E, \vec{J})$ (ii) $M(E, \vec{J})$ 

図 4-1

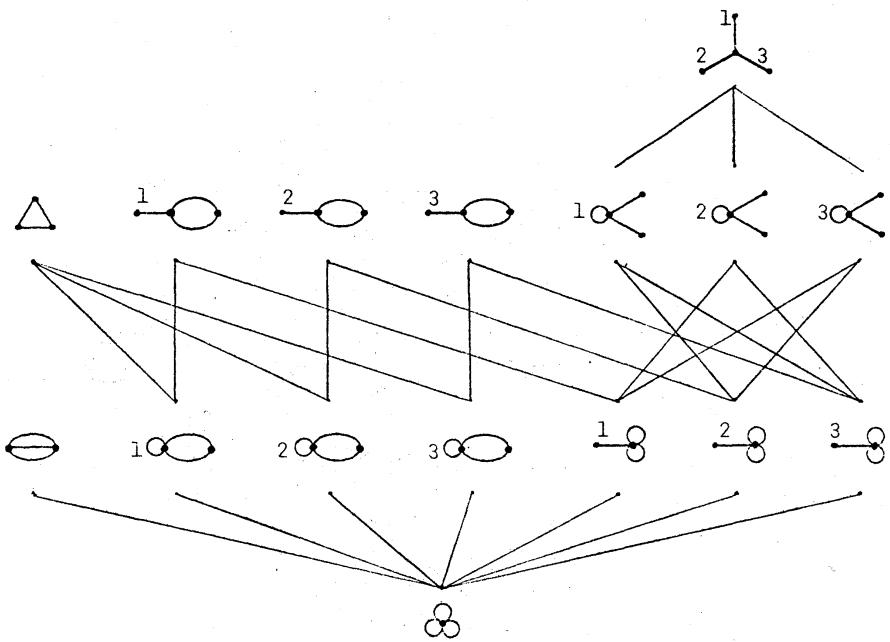
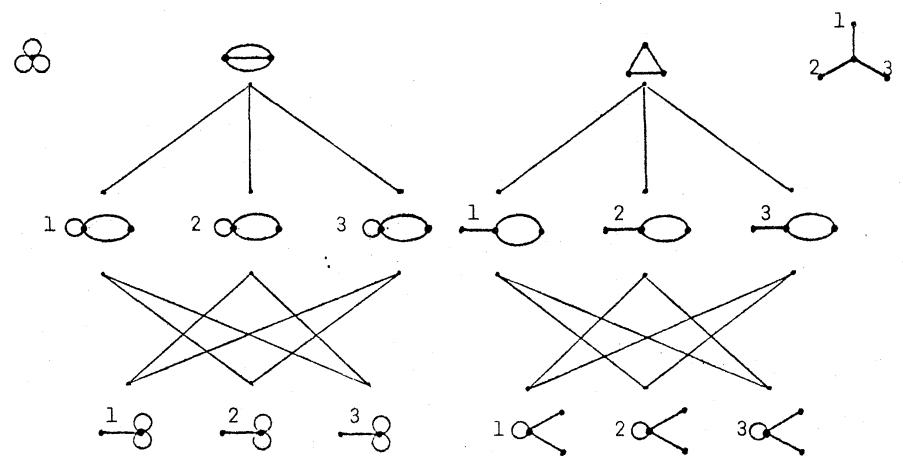
(iii) $M(E, \vec{A})$ (iv) $M(E, \vec{B})$ 

図 4-2

3.8 マトロイドの結と交

一般に、 $\mathcal{A} = \{\alpha_i : A_i \rightarrow A ; i \in I\}$ と A の部分対象の族とするとき、 A の部分対象 $\alpha : A' \rightarrow A$ が族 \mathcal{A} の 結 であるとは次の条件が成り立つこときい。

$$(i) \forall i \in I \exists \delta_i : A_i \rightarrow A' \quad \alpha_i = \alpha \delta_i$$

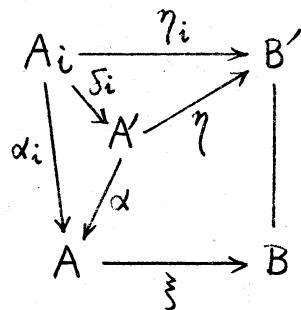
(ii) 任意の対象 B 、任意の射 $\beta : A \rightarrow B$,

任意の B の部分対象 $\beta : B' \rightarrow B$ に

対して、

$$\forall i \in I \exists \eta_i : A_i \rightarrow B' \quad \beta \eta_i = \beta \alpha_i$$

$$\Rightarrow \exists \eta : A' \rightarrow B' \quad \beta \eta = \beta \alpha$$



結 A' を $\bigcup_{i \in I} A_i$ で表わす。特に $I = \{1, 2\}$ のとき、 $A_1 \cup A_2$ で表わす。一般には部分対象の族の結は常に存在するとは限らない。

マトロイドの圏において、マトロイド M の部分マトロイドの族 $\{M_\lambda ; \lambda \in \Lambda\}$ に対して、この族の結が存在するときそれをこの族の 結マトロイド と呼ぶ。

M, M_1, M_2 を E 上のマトロイドとし、 $M(E, \vec{\chi})$ における順序に従って $M_1 \prec M, M_2 \prec M$ とする。 M の部分マトロイドとして $M_1 \sqcup M_2$ の結マトロイド $M_1 \cup M_2$ が存在すれば、

$$(1) \quad M_1, M_2 \prec M_1 \cup M_2$$

$$(2) \quad \forall M' \in M(E, \vec{\chi}) \quad M_1, M_2 \prec M' \Rightarrow M_1 \cup M_2 \prec M'$$

であることが導かれる（上の定義で $\beta = 1_M$ とすれば）。

命題27によつて マトロイドの圏においては 結マトロイドは
常に存在しないことがわかる。

一方、2つのマトロイド $M_1 = (E_1, \mathcal{J}_1)$, $M_2 = (E_2, \mathcal{J}_2)$
に対して, $\mathcal{J}_1 \vee \mathcal{J}_2 = \{I_1 \cup I_2 ; I_1 \in \mathcal{J}_1, I_2 \in \mathcal{J}_2\}$ は $E_1 \cup E_2$
上の独立集合族となることが知られていて、マトロイド $M_1 \vee M_2$
 $= (E_1 \cup E_2, \mathcal{J}_1 \vee \mathcal{J}_2)$ は M_1, M_2 の 合併マトロイド と呼ばれる。

明らかに、どのマトロイドの圏を考へても 合併マトロイドは
結マトロイドとは異なる。たとえば、任意のマトロイド M に
対して、 $M \vee M = M$ は常に成り立つが、 $M = U_{m, 2m}$ として
き、 $M \vee M = U_{2m, 2m}$ となる。

一般に、 A の部分対象の族 $\mathcal{A} = \{\alpha_i : A_i \rightarrow A ; i \in I\}$ に對
して、 A の部分対象 $\alpha : A' \rightarrow A$ が族 \mathcal{A} の 交であるとは次の条件
が成り立つことをいう。

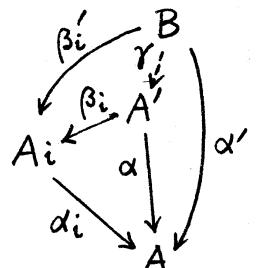
$$(i) \forall i \in I \exists \beta_i : A' \rightarrow A_i \quad \alpha = \alpha_i \beta_i$$

(ii) 任意の対象 B , 任意の射 $\alpha' : B \rightarrow A$
に對して,

$$\forall i \in I \exists \beta'_i : B \rightarrow A_i \quad \alpha' = \alpha_i \beta'_i$$

$$\Rightarrow \text{一意に } \gamma : B \rightarrow A' \text{ が存在して } \alpha' = \alpha \gamma$$

このとき交 A' を $\bigcap_{i \in I} A_i$ で表わす。特に $I = \{1, 2\}$ のときは、
 $A_1 \wedge A_2$ で表わす。一般に 1T 部分対象の族の交は常に存在す



3と1は限らない。

マトロイドの圏において、マトロイド M の部分マトロイドの族 $\{M_\lambda; \lambda \in \Lambda\}$ に対して、この族の交が存在するときこれをこの族の 交マトロイド と呼ぶ。

M, M_1, M_2 を E 上のマトロイドとし、 $M(E, \vec{\alpha})$ における順序に關して $M_1 < M, M_2 < M$ とする。 M の部分マトロイドとして M_1 と M_2 の交マトロイド $M_1 \cap M_2$ が存在すれば、

$$(1) \quad M_1 \cap M_2 < M_1, M_2$$

$$(2) \quad \forall M' \in M(E, \vec{\alpha}) \quad M' < M_1, M_2 \Rightarrow M' < M_1 \cap M_2$$

であることが導かれる。

命題27によりマトロイドの圏における交マトロイドは常に存在しないことがわかる。

なお、圏論において 結と交とは双対的な概念ではないことに注意すべきである。

E 上の2つのマトロイド $M_1 = (E, J_1), M_2 = (E, J_2)$ に対して、 $J_1 \cap J_2$ は一般にはマトロイドの独立集合族とはならぬが、 $J_1 \cap J_2$ が独立集合族となるとき、 $(E, J_1 \cap J_2)$ を M_1 と M_2 の 共通マトロイド と呼んでいい。

命題28 共通マトロイドは $\text{Mat}(\vec{J})$ やび $\text{mat}(\vec{J})$ における交マトロイドである。

証明 $|E| = m$ とする。 E 上のマトロイド $M_1 = (E, \mathcal{J}_1)$, $M_2 = (E, \mathcal{J}_2)$ はいずれも $M = (E, \binom{E}{m}) \cong U_{m,m}$ の部分マトロイドである。このとき単射 $\alpha_i : M_i \rightarrow M$ としては E 上の恒等対応 1_E を考えておく。 M_1 と M_2 の共通マトロイド $(E, \mathcal{J}_1 \cap \mathcal{J}_2)$ を M' とおき、 $M' = M_1 \cap M_2$ であることを示す。 $\alpha : M' \rightarrow M$ はやはり E 上の恒等対応による射とする。

(i) $\mathcal{J}_1 \cap \mathcal{J}_2 \subset \mathcal{J}_i$ であるから β_i を 1_E による射とすれば $\alpha = \alpha_i \beta_i$ 。

(ii) $N = (E', \mathcal{J}')$, $\alpha' : N \rightarrow M$, $\alpha' = \alpha_i \beta'_i$ と仮定する。 α_i は 1_E であるから

α' , β'_i は E' から E への対応としては同じものである。この対応を γ とおく。 $\beta'_i \in \vec{\mathcal{J}}[N, M_i]$ であるから $k\mathcal{J}' \subset \mathcal{J}_i$ ($i=1, 2$), ゆえに $k\mathcal{J}' \subset \mathcal{J}_1 \cap \mathcal{J}_2$ 。したがって対応 γ による射 $\gamma : N \rightarrow M'$ が存在して $\alpha' = \alpha \gamma$ となる。さらに, $\gamma' : N \rightarrow M'$ $\alpha' = \alpha \gamma'$ とすれば γ' は対応として γ と一致するから $\gamma' = \gamma$ である。

以上は $\text{Mat}(\vec{\mathcal{J}})$ において考えた。 $\text{mat}(\vec{\mathcal{J}})$ は同様である。

(証明終)

したがって, M_1 と M_2 の共通マトロイドは $M_1 \cap M_2$ と表わすことにする。

なみ、合併マトロイドと同様に、任意の 2 つのマトロイド M_1, M_2 に対して マトロイド $M_1 \wedge M_2 = (M_1^* \vee M_2^*)^*$ を考えることができるが、もちろんこれはどの図にあっても交マトロイドとは異なるものである。たとえば、 $E = \{1, 2, 3\}$ 上のマトロイド

$$M: \begin{array}{c} 1 \\ | \\ 2 \quad 3 \end{array} \quad M_1: \begin{array}{c} 1 \quad 3 \\ \diagup \quad \diagdown \\ 2 \end{array} \quad M_2: \begin{array}{c} 1 \\ \diagup \quad \diagdown \\ 3 \quad 2 \end{array}$$

に対して、

$$M_1 \wedge M_2: \begin{array}{c} 1 \quad 3 \\ \diagup \quad \diagdown \\ 2 \end{array} \quad M_1 \cap M_2: \begin{array}{c} 3 \quad 1 \\ \diagup \quad \diagdown \\ 2 \end{array}$$

(共通マトロイド)

である。

あとがき

われわれの目標はアルゴリズムと関連してマトロイドを考察することであったが、合併マトロイドや共通マトロイドなどの性質を明らかにするために圏論的接続を試みた。まだ目的を十分果たしているとはいえないが、この作業の最初の報告が本稿である。マトロイドの諸公理系の体系的な整理に関する程度成果があったといえよう。

なお、マトロイド間の射としてはフラット族子のなす束に関連して "strong map" などが比較的よく研究されている。^{[4], [7]}

2. ドリフト公理系対照表

1) $B \neq \emptyset$	1) $E \in \mathcal{D}$
2) $B_1, B_2 \in \mathcal{B} \Rightarrow 'B_1 \notin B_2 \text{ と } B_2 \in B_1'$ [3) δ , δ 出可能]	2) $S \in \mathcal{S}, T > S \Rightarrow T \in \mathcal{S}$
3) $B_1, B_2 \in \mathcal{B}, B_1 \neq B_2 \Rightarrow \exists b_1 \in B_1 - B_2 \ni b_2 \in B_2 - B_1, B_1 \cup \{b_2\} - \{b_1\} \in \mathcal{B}, B_2 \cup \{b_1\} - \{b_2\} \in \mathcal{B}$	3) $S_1, S_2 \in \mathcal{S}, S_1 > S_2 \Rightarrow \exists x \in S_1 - S_2, S_2 - \{x\} \in \mathcal{S}$
1) $\emptyset \in \mathcal{J}$	1) $E \notin \mathcal{W}$
2) $I \in \mathcal{J}, J \subset I \Rightarrow J \in \mathcal{J}$	2) $W \in \mathcal{W}, V \subset W \Rightarrow V \in \mathcal{W}$
3) $I_1, I_2 \in \mathcal{J}, I_1 < I_2 \Rightarrow \exists x \in I_2 - I_1, I_1 \cup \{x\} \in \mathcal{J}$	3) $W_1, W_2 \in \mathcal{W}, x \notin W_1 \cap W_2, W_1 \cup W_2 \notin \mathcal{W} \Rightarrow (W_1 \cap W_2) \cup \{x\} \in \mathcal{W}$
1) $\emptyset \notin \mathcal{D}$	1) $E \notin \mathcal{H}$
2) $D \in \mathcal{D}, C \supset D \Rightarrow C \in \mathcal{D}$	2) $H_1, H_2 \in \mathcal{H} \Rightarrow H_1 \subseteq H_2 \text{ と } H_2 \in \mathcal{H}$
3) $D_1, D_2 \in \mathcal{D}, x \in D_1 \cup D_2, D_1 \cap D_2 \notin \mathcal{D} \Rightarrow D_1 \cup D_2 - \{x\} \in \mathcal{D}$	3) $H_1, H_2 \in \mathcal{H}, x \notin H_1 \cup H_2, H_1 \neq H_2 \Rightarrow \exists H_3 \in \mathcal{H} H_3 \supset (H_1 \cap H_2) \cup \{x\}$
1) $\emptyset \notin \mathcal{C}$	1) $E \in \mathcal{R}$
2) $C_1, C_2 \in \mathcal{C} \Rightarrow 'C_1 \subseteq C_2 \text{ と } C_2 \in \mathcal{C}'$	2) $F_1, F_2 \in \mathcal{F} \Rightarrow F_1 \cap F_2 \in \mathcal{F}$
3) $C_1, C_2 \in \mathcal{C}, x \in C_1 \cap C_2, C_1 \neq C_2 \Rightarrow \exists C_3 \in \mathcal{C} C_3 \subset C_1 \cup C_2 - \{x\}$	3) $F_1, X, F_2 \in \mathcal{F}, F_1 \supset X \supset F_2 \Rightarrow \exists Y \in \mathcal{F} F_1 = \text{amp} \{x, Y\}, F_2 = X \cap Y$
1) $\emptyset \in \mathcal{J}$	4) $\forall x \in E \quad F(x) = \bigcap \mathcal{F} \quad \#_{E \in \mathcal{E}} F(x) \geq \bigcap \mathcal{F}$
2) $T_1, T_2 \in \mathcal{J} \Rightarrow T_1 \cup T_2 \in \mathcal{J}$	5) $F_1, F_2 \in \mathcal{F} \quad F_1, F_2 \supseteq F_1 \cap F_2 \Rightarrow F_1, F_2 \Rightarrow F_1 \cap F_2$
3) $T_1, X, T_2 \in \mathcal{J}, T_1 \subset X \subset T_2 \Rightarrow \exists Y \in \mathcal{F} T_1 = \text{inf} \{x, Y\}, T_2 = X \cup Y$	$\Rightarrow \text{amp} \{F_1, F_2\} \Rightarrow F_1, F_2$
4) $\forall x \in E \quad T(x) = \bigcup \mathcal{T} \quad \#_{E \in \mathcal{E}} T(x) \leq \bigcup \mathcal{T}$	
5) $T_1, T_2 \in \mathcal{J}, T_1, T_2 \subset T_1 \cup T_2 \Rightarrow \text{inf} \{T_1, T_2\} \in T_1, T_2$	

14

$\mathcal{B} = \max \mathcal{J}$	$\mathcal{B} = \min \mathcal{J}$
$T(x) : \begin{cases} (i) x \notin T(x) \\ (ii) \forall T \in \mathcal{J}, x \notin T \Rightarrow T(x) \supset T \end{cases}$	$\mathcal{J} = \{ \text{sub } \mathcal{B} \}$
$\mathcal{J} = \{ \text{sub } \mathcal{B} \}$	$\mathcal{J} = \{ \text{quot } \mathcal{B} \}$
$\mathcal{D} = \{ \text{quot } \mathcal{C} \}$	$\mathcal{W} = \{ \text{sub } \mathcal{K} \}$
$\mathcal{C} = \{ \text{min } \mathcal{D} \}$	$X \Rightarrow Y : \begin{cases} (i) X \supseteq Y \\ (ii) X \supset Z \supset Y \Rightarrow Z = X \text{ 且 } Z = Y \end{cases}$
$\mathcal{J} = \text{join } \mathcal{C}$	$\mathcal{F} = \text{meet } \mathcal{K}$

4

参考文献

- [1] B. Mitchell : Theory of Categories, Academic Press, 1965.
- [2] S. Mac Lane : Categories for the Working Mathematician, Springer-Verlag, 1971.
- [3] D.J.A. Welsh : Matroid Theory, Academic Press, 1976.
- [4] W.T. Tutte : Introduction to the Theory of Matroids, American Elsevier, 1970.
- [5] 富沢信明, 伊理正夫 : マトロイドについて, 計測と制御, Vol. 16, pp. 455-468, 1977.
- [6] 富沢信明 : マトロイドの自己双対的右基公理について, 電子通信学会技術研究報告, Vol. 77, No. 197, pp. 71~73, 1977.
- [7] H.H. Crapo, G.C. Rota : On the Foundations of Combinatorial Theory, Combinatorial Geometries, M.I.T. Press, 1970.